

国土審議会計画部会
第1回自立地域社会専門委員会

日時：平成17年11月3日（木）15:00～17:30

場所：あかん遊久の里 8Fギャラリー

（議事録）

○ 事務局 それでは、ただ今から国土審議会計画部会自立地域社会専門委員会を阿寒町におきまして開催させていただきます。冒頭につき、この委員会の趣旨を簡単に皆様にご説明させていただきます。去る10月18日に国土審議会の第1回の計画部会が開催され、5つの専門委員会が設置されました。本委員会はその1つでございます。当専門委員会では、人口減少が進展する中、多様な社会的サービスをどう提供していくか、あるいは自立的な取組みによる地域活性化の観点から全国の区域について定める国土形成計画に関する専門の事項を調査する」こととされております。

なお、本日の議事の公開についてでございますが、開会から閉会まで公開させていただきます。報道関係の皆様、それから行政の皆様、地元にお住まいの皆様にも傍聴をいただいておりますので、よろしくお願いいたします。

続きまして、本日は第1回の委員会でございますが、10月13日に懇談会の形式で実質的に第1回をさせていただいておりますので、前回ご欠席の委員の方のみご紹介をさせていただきます。お手元の資料1枚目の議事次第をおめくりいただきまして、資料1としまして、専門委員会の委員名簿がございますので、それをご参照いただければと思います。上から3人目に記載させていただいております、梅川智也委員でございます。それから下から4人目に記載させていただいております、清水哲夫委員でございます。本日もご欠席の委員も含めまして、13名でこの自立地域社会専門委員会を今後進めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

また、本日の委員会、この阿寒のご当地で、これまで地域の活性化に取り組んでこられた方々にご参加をいただいております。

続きまして、本専門委員会の委員長についてです。計画部会の設置要綱でこれは定まっております。計画部会長の指名によるということになっております。既に計画部会長、森地茂先生から奥野委員長にこの自立地域社会専門委員会の委員長をというご指名がございます。以後の議事進行につきましては、したがって奥野委員長にお願いしたいと存じます。

○委員長 皆さん、こんにちは。大変僭越でございますけれども、ご指名でございます。本委員会の委員長を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

本委員会は、自立地域社会専門委員会という名前で会議を開くのは、本日が第1回目でございます。それを統一させていただきたいなということです。「国土形成計画」、今度新たにつくられる全国計画でございますけれども、その中の1つの柱が、後ほど事務局から説明があると思いますが、地域の自立ということでございます。この委員会では、自立と、それに向けて地域の活性化の方策、それから少子高齢化社会が進展します中で、地域の方々にどういうサービスをどういうふうな方法で提供していくのか。そういったことを主に審議してまいるということになっております。

本日は、阿寒の地において、これまで地域の活性化に取り組んでこられた5名の方々においでいただきまして、私どもといたしましても、そういう先導的な取り組みをしてい

っしやる方々にいろいろ話を聞きながら、またお教えいただきながら指針性のある全国計画をつくってまいりたいと願っております。

本日、文化の日で皆さんお仕事でお忙しいのではないかと思います、わざわざお出向きいただきまして、どうもありがとうございます。簡単ですが、お礼のあいさつに代えさせていただきます。

それでは議事に入ります前に、計画部会の設置要綱の規定がございまして、委員長が委員長代理を指名するということになっております。大変恐縮でございますけれども、森野委員に委員長代理をお願いいたしたいと思いますが、よろしゅうございますでしょうか。よろしくお願ひ申し上げます。何か、ごあいさついただくことがございましたら。

○委員長代理 どうも私、若いつもりでおったのですが、委員長に次いで私がもう年だということなものですから、微力ながら委員長の補佐を務めさせていただきたいと思ひます。かなりタイトな日程の議論かと思ひますが、皆様、ひとつよろしくお願ひ申し上げます。

○委員長 よろしくお願ひします。

それから本日、国土交通省から大変お忙しい中、峰久国土交通審議官にお越しいただいておりますので、ごあいさついただければと思ひます。

○峰久 国土交通省の国土交通審議官の峰久でございます。今日は、委員の皆様方には本当にお忙しいところを、この北海道までおいでいただきながら委員会をやっていただきましてどうもありがとうございます。それから特に、地元の阿寒町の方々におきましては、急にお願ひしたにも関わらず、この委員会に参加していただきまして本当にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。

国土形成計画が新たに制度上できまして、その目的、あるいはこの専門委員会の趣旨等については今、事務局及び委員長からおっしゃっていただきましたので、そこについては省かせていただきます。いずれにしてもわれわれの団塊の世代というのが、私は昭和24年生まれで森野先生が同じ学部で25年2月だったですかね。同じような団塊の世代で、われわれが仕事から卒業しかけますと、あるいはわれわれがもうだんだん移るにしたがひまして、少子高齢化が進んでいくという世代でございます。そういう中で、初めてそういう意味で人口減少が進んでいくわけでございますけれども、そこで特に自立的にいろいろな社会的サービスを提供するのは難くなるような地域もたくさん出てまいります。こういう地域の地域構造、都市計画構造、あるいは産業構造をどうするのかというのが、非常に大きな問題でございます。

それと同時にあわせて、その中で自立的にどういう取り組みをして、地域を活性化していくんだという方法論。人的な熱意とか、あるいは教育の問題とか、いろいろなことがあると思ひますが、そういう人的なものを含めまして活性化の手法というものが非常に重要だと思っております。当然、われわれも担当しておりますので、これについていろいろ活発な議論をいただきながら、新しい計画、将来安心して生活できるような将来像を早くつくっていかねばいけないと思っております。

それと同時にあわせて個人的には、先ほど申しましたようにわれわれは団塊の世代でございまして、産業的にはいろいろな面で貢献した面があると思うんですけども、一方で人口の大都市への集中とか、過密の問題。あるいは私は香川県の出身なんですけども、われわれが出て行って田舎のほうがだんだん過疎化してきておりまして、そのような田舎の過疎の問題。こういうのがある中で、いずれにしても良き面、活性化とか、そういうように、あるいは過疎化とか、そういう良い面でも悪い面でもわれわれが動いていく年代というのは、だんだんとそういう問題が起こってくると。

われわれが出て行くと、今度は年金がたくさん出て社会的に困るのではないかと、あるいは産業が停滞するのではないかと、こういうことが言われております。そういう中で、われわれもまだまだ若いつもりでございまして、われわれの団塊の世代が、個人的な観点からで申し上げるのですけれども、今後どうやって生活していくんだらうと。特にいろいろな技術を持っておられる方もおられますし、そういう方も含めて、産業面でどういうふうに活動する場があるんだらうかと。あるいは、地域に帰って、いろいろな社会的な参加をさせていただきながら、地域に貢献できる道があるんだらうかと、そういう将来的な生き方等について、われわれの団塊の世代はどういうふうにしていくのんだらうか、どう貢献できるんだらうか。あるいは、どうやって生きがいを感じていくんだらうかと、個人的には、極めてそういう面も重要だと思っております。そういう意味で、こういう将来的な絵を描いていただいくときに、われわれのそういう世代ですとか、あるいは少子高齢化と言われますが、女性の働く方々がどういうふうな生活をしていくんだらうかということとか、具体的に分かるような、方向が見えるような、あるいは手法が分かるような、そういうふうな計画面も必要ではないかと個人的には思っております。

そういう中で、今日は特にこの阿寒町の阿寒湖温泉の皆様方におかれましては、いろいろな支援を活用しながら観光の取り組みをされておりますし、それから行政と民間が共同して行うとか、あるいは今日来ていただいておりますが、女性の方々によるボランティア活動とか、いろいろな面で行政、あるいは他の面から評価されている方々に集まっただけでございますので、そういう方々と専門委員の先生方の活発なご議論をいただきながら、将来への計画づくりの基礎とさせていただけるようにお願いします。

それから最後になりますけど、国土交通行政、いろいろな幅広いことをやっております。災害面から交通の面、あるいはいろいろな面、仕事をやっておりますけれども、あらためましてこの広い行政につきましてご支援を賜りますようお願い申し上げます、私のあいさつとさせていただきます。ちょっと長くなりました。よろしく願いいたします。

○委員長 どうもありがとうございました。

それでは早速、議題に入りたいと思います。議事次第にございますように、本日の議題は3つございます。1つは、国土形成計画策定に向けた状況について。それから、2番目が、阿寒湖温泉における地域活性化の取り組みについて。3番目が、質疑応答および意見交換でございます。

国土形成計画法につきましては、先ほど事務局から説明がございました10月13日の懇談会のおりに、委員の皆様には説明、あるいは意見交換をしたところでございますけれども、今日は地元の方もいらっしゃいますし、また傍聴の方も多数おいででございますので、あらためて事務局から説明をお願い申し上げます。

○事務局 それでは、ごく簡単にご説明をさせていただきたいと思っております。お手元の資料のまず2をご覧くださいませでしょうか。カラーの「国土形成計画制度の改革のポイント」というものがございます。従前、国土総合開発法という法律に基づきまして、全国総合開発計画というものをつくっておりました。この仕組みを今年1月からの通常国会に法案を提出いたしまして、国土総合開発法という法律を、国土形成計画法という名称に改めてまして、計画の名称も国土形成計画として全く衣替えをしてつくっていくということでございます。大きく2つ、変更点、改革点がございます。1つは、計画のつくり方ということで、このペーパーの上半分、国と地方の協働ということを掲げてございます。新たな国土形成計画では、全国計画、広域地方計画、この2つの計画をつくってまいりますけれども、特に広域地方計画につきましては、その下の白い枠のところに書いてありますが、国の出先機関、都府県、政令市、地元経済界等、おのおの対等な立場で協議いただく場をつくってご議論いただくということでございます。

それからそのすぐ下、水色の矢印のように見える部分ですが、計画への多様な主体の参画ということで、地方公共団体から国への計画提案制度、あるいは国民の意見を反映させるという意味での、いわゆるパブリック・インボルブメントの制度、こういった仕組みをすべて法律で定めて、行政のほうに、われわれのほうに義務づけるというような仕組みにしております。本日、こちらにお伺いいたしまして、いろいろお話をお伺いするというのもこういう考え方の一環でございます。われわれ、ぜひ、こういう取り組みを通じて、東京で書き物としてつくる計画でなくて、地に足のついた計画にしていきたいということでございます。

それからもう1つは、計画の理念、内容にわたります部分であります。「開発中心からの転換」とこの下に書いております。従前、計画の名称、あるいは法律の名称が表しておりますとおり、国土総合開発という概念が中心でございました。開発基調、量的拡大というところから、成熟社会型の計画に改めていくということで、景観・環境を含めた国土の質的向上。以下いくつかの観点をここに書いております。計画の理念につきましても日本の新たな発展段階に応じまして考え方を改めていこうというようなことで、法律を改めさせていただいたということでございます。

資料4にちょっと目を移していただければと思います。1枚紙で資料4というものがございます。今後、この国土形成計画をおおむねですが、今のところ2年のスケジュールをかけてつくっていきたくて思っております。来年の秋ごろ中間取りまとめ、再来年、仕上がりという格好で、まず全国計画の作業を始めたかと思っております。主なご審議の場として、国土審議会がでございます。そのもとに計画部会が設置されておまして、その部会

のもとで5つ専門委員会が設置されております。大体タイトルをご覧くださいますと取り上げる中身を想像いただけるとと思います。ライフスタイル・生活専門委員会、産業展望・東アジア連携専門委員会、自立地域社会専門委員会、国土基盤専門委員会、持続可能な国土管理専門委員会、この5つでございます。おのおの名が表しておりますとおりの事項をご審議いただくということでありませう。本専門委員会は、この上から3つ目、自立地域社会でございまして、いろいろなサービス提供の仕組み、活性化の取り組みを考えていきましようということと設置されております。

どんどん資料的には端折らせていただきまして、右肩に資料8-1と掲げておるものがございます。先般、この専門委員会を懇談会の格好で、10月13日に開催させていただきましたことがございます。その場の資料として提出させていただきました。おおむね全体としてこの専門委員会でどういふことを議論していこうかというフリーディスカッションの素材として供させていただきますものであります。柱書きのところだけざっとご覧くださいたいと思います。

1ページ目の上の1番ですが、人口が減少しているということで、持続可能で自立的な地域社会の姿をどう描くか。この鍵は何か。その際の国の関与、役割についてどう考えるのかというのが1つでございます。それからそのページの中程から下、大きな2番、地域コミュニティの今日的な意義についてどう考えるか。地域コミュニティがここで出るのは唐突感があるかも分かりませんが、いろいろな生活サービスを提供していく。あるいは活性化を図っていく。その土壌としてもう一遍地域コミュニティの今日的な意義を確認する意味があるのではないかという問題意識であります。それから1ページ目の一番下、3番と書いております。いろいろな生活関連サービス、防災から始まりまして、福祉、介護、医療、いろいろありますが、そういったものを持続的に提供するためのシステムについてどう考えていくかといったような観点でございます。

それから4番目が2ページ目の下のほう、地域の自立的な活性化を目指して地域経営のあり方をどう考えていくかということでございます。ここが本日阿寒にお伺いしておりますことに、一番密接に関連している部分であろうと思っております。いろいろITとか都市・農村交流とかの問題意識を1番に書いておりますが、そのページの一番下から次のページにかかりまして、いろいろな地域固有の資源があります。農林水産資源、環境資源、観光資源、そういった地域固有の資源をどのように発掘して、地域での高付加価値創造、他地域との差別化等の観点から、その資源をどう活用していくか。視点の例示のところに入りますと、成功事例の解析と方法論の一般化ということで、今まさに阿寒で観光振興と、それからまちづくりを組み合わせお取り組みになっている。あるいは主体的には民間主体が中心になられて、ボランティアというような取組みもあり、それを地元の町がしっかり支えられ、しかもそれを地域外の視点でまた支えていく。いろいろな主体が絡みあつて、統一の問題意識のもとでお取り組みになっている。こういったことをぜひ学ばせていただこうというのが、本日の趣旨でございます。

その下、いくつか矢印の所をご覧くださいますと、その際の地域への人材の誘致みたいなことで、先ほど審議官からごあいさつ申し上げました団塊の世代みたいないろいろな問題意識を、この委員会では包括的に活性化の観点、この部分では活性化の観点から取り上げていきたいと考えておるところでございます。

そういう意味で、本日、阿寒に委員の皆様にお運びいただきまして、地元のそういうお取り組みをされている方々のお話をじかに伺い、意見交換をしていただく機会を設けさせていただいたということでございます。以上、簡単でございますが、ご説明とさせていただきます。

○委員長 はい。ありがとうございます。かいつまんでご説明いただきましたが、何か、この段階でご質問などございましたら。それでは、後でまた質疑応答の時間がございますので、そのときにまとめて意見交換の中でさせていただければと思います。ありがとうございます。それでは早速、議事の2に入ります。「阿寒（阿寒湖温泉）における地域活性化の取り組みについて」であります。阿寒湖温泉における観光の取り組みにつきましては、委員が当事者としてずっとかかわってこられておるということでございますので、委員からまず総括的なお話をいただければと思っております。よろしくお願い申し上げます。

○委員 私は、今日は委員というよりも完全にお迎えする側ということで、地元の皆様と一緒にこれまで6年間まちづくりに取り組んでまいりました。その全般的なお話をさせていただいて、私の話の後、本日ゲストスピーカーにお招きした地元の皆さんのお話をいただいて、これまでの取組みを皆様方にご理解いただければと思う次第でございます。

私もこれまで二十数年、地域のプランニングをやってまいりましたが、私自身の課題としては、いくらいい計画をつくってもその先、実現させるというのは極めて難しい。本来であればそこに力を注いでいかなければいけない。プランナーとしては、プランができるのが最終ゴールなわけですけれども、地域から見ればプランができるというのはスタートの段階であって、そのスタートからが実は本当の地域づくりだということで、そこを実現させなければ意味がないと私自身、ずっと考えてきておりました。

6年前に阿寒とお付き合いが始まって、これが私がずっと考えていた課題が、ひょっとすると何らかの糸口になるのかなという期待を込めて、私自身は毎月のように通っていたかと思います。非常に期待を込めて、まじめに真剣にお付き合いをしてきたということかなと思います。その一端を今日ご披露させていただいて、地元の皆さんにもフォローをしていただいて、ご理解いただきたいと思っている次第でございます。

パワーポイントを見ていただければと思います。まず、地元の皆さんが多いので紹介は少なくしておきます。先ほどお話ししましたように、この阿寒の特徴を1つだけ言えば、この土地所有にあるのかなと思います。前田一步園財団がほとんどの土地を持っているというので、いい面が多いわけですけれどもいろいろな問題も出てきているということかと思えます。

温泉街の概要。これは先ほど歩いていただきましたけれども、真ん中に中央通りという

ピンクの道路がありますけれど、そこから湖岸に向かって旅館が建ち並んでおりまして、肝心の湖が見えないという課題は再三言われていたところでございます。

観光地として見ますと道東の宿泊拠点でありますし、宿泊客は若干減ってはおりますが、ほぼ 100 万人弱ぐらいということです。問題は、阿寒に泊まれるお客様の 9 割が 1 泊。1 泊のお客様がほとんどです。そのうちの 3 分の 2 のお客様は、午後 4 時以降に到着してお風呂に入って食事をして、次の朝、9 時には出て行ってしまうというような観光行動だったんです。それを何とか変えていけないかということがあります。

それから居住地としますと、住民が 1,800 人おりますが、その中で定住を希望される方の割合が非常に少ない。その理由としては、医療施設、あるいは文化施設の不備だとか、買い物に不便だとかいろいろな問題があるということでございます。

それで地元の方々がこのまちづくりに取り組んだ背景というのが、一つの危機感だったと思うのですが、観光客は本当に阿寒が好きで、阿寒を目的にしてこのまちを訪れているのか、それとも大手の旅行会社の企画商品にのって、たまたまその中の宿泊地が阿寒だったのか。その辺がどうも分からなくなっているということで、ひょっとすると後者のほうが増えてきているのではないだろうかという危機感を持たれたわけです。私どもにお話がありまして、では、こんな進め方はどうかということで、われわれと地元の皆さんと、ここに合意事項とありますけれど、最低 3 年間はお付き合いしましょうと。お金の話になってしまいますけれども地元が 500 万円、私どもが 300 万円、両方で 800 万円出し合って事業をやっつけよう。これは 1 年間です。計画づくりに 2 年間。それからその後、その計画を実現させるというアクションにもう 1 年間使って、とにかく 3 年間、まずやってみようということで、お付き合いが始まるわけです。

下にありますけれども、2000 年に阿寒湖温泉活性化戦略会議ができて、この会議でビジョンづくりが始まっていくわけです。計画をつくるだけでは面白くないということで、できることから、やれることからやっつけようということで 4 つの部会を立ち上げます。人数でいきますと確か 70、80 人になろうかと思えます。ショッピングの楽しみ部会以降、4 つの部会を立ち上げて、住民ができることからやっつけようということをやりました。具体的な取り組みは後でお話しできるかと思えます。その一方でアンケート調査をやったり、ヒアリングをやったりということで、計画に必要な条件を詰めていくという作業をやっておりました。

2000 年、それから 2001 年度。2001 年度には、後で詳細なお話があるかと思えますけれども、海外の先進地に視察に行きました。結局この参加された皆さんが後々のまちづくりのキーマンになっていくわけなんですけれども、そういった取り組みをしました。それから推進の組織の問題。これも蔵根さんから後でお話があるかと思えますが、まちづくり協議会というものをつくったり、あるいは、まりも倶楽部という組織ができたりということで、そういうアクションと計画づくりがセットになって進んできたということだと思います。

ここにキーワードと書いておきましたけれども、やはり住民参加。計画の策定の段階か

ら住民参加という手法を取り入れて、地域の資源を発掘するというのも、地元の皆さんとそれからわれわれ外部からの先生方ですね。この両者の目で、「内の目」と「外の目」をあわせながら資源発掘をやっていったと。その地域資源の発掘の最大のポイントは、実は人材の発掘と言ってよろしいかと思えますけれども、そういうまちづくりのキーマンになってくれる方々がこういった活動を通じて出てきたということが大きいのかなと思います。

それからもう1つのキーワード、情報公開。まちづくりをやっておりますと、燃えていく方と逆に冷めていく方が出てきます。それを中和するために必要なことは、この情報公開、情報共有だと思うんですね。これを会議をやるたびに出し続けました。「今、こういうことで進んでいるよ」ということを情報発信し、情報を共有してもらったという、これが大きかったかなと思います。

それから、これもまた後でお話がありますけれども、推進組織をきちんと設立していったということだと思います。具体的に取り組んでいったこの花いっぱいプロジェクト、それからこのまりも倶楽部の取り組み。これは後で詳細はお話があるかと思えます。そういうことをやりながら、このプラン、素案ができて、その素案を実はわれわれ外部の人間ではなくて、地元の幹事の皆さん方が町内会ごとにきっちり何度も何度も説明会をしていって、合意形成を図っていった。で、プランが出来上がる。それが2002年3月です。

左側にありますのが、「(阿寒湖温泉)再生プラン2010」ということで、まちづくりのバイブル的なことになっております。これが構造改革プラン。もう1個、同じくつくったのが、小さく右側にあります「意識改革プラン」。やはり構造改革の前に皆さんの意識を変えなければ駄目だということで、こんな冊子もつくってございました。中身については、細かくお話しする時間はございませんけれど、先ほど言ったような観光の構造を変えていこう。少しでも阿寒に滞在してくれる、滞留時間を延ばしていこうと。簡単に言えば、2泊3日できる。とにかく朝から夜まで1日は必ずこの阿寒で過ごしてもらおうというような、2泊3日できる地域になっていこうよと。そのための施策を考えていこうよということで、9つの重点プロジェクト。その中の一番の核になるプロジェクトが、先ほどご視察いただいたときに「湖岸がバラバラに整備されている」というお話をさせていただきましたけれども、その一体となるような公園化をまず阿寒湖温泉の核としてつくっていこうではないだろうかということで、筆頭プロジェクトとして掲げたわけです。そこまでが2010プランのプランづくりという2年間だったのです。

それ以降、最初の3年間の最後に何をやろうかということで、そのプロジェクトの具体化ということでやっていくわけなのです。1つは、なかなかまちづくりの財源がないということで、国の事業を引っ張ってこようよということで、補助事業を引っ張ってきました。あるいはわれわれが皆さんとつくった計画というのは、あくまでも地元のこういうふうにしたいというプランでございまして、これは公的な位置づけは全然ないわけです。それを町の計画に反映させていただくとか、あるいは北海道庁にお話するだとか、いろいろ公的な計画に位置づけられるような動きをしていったということが3年目です。

それからプロジェクトの計画管理ということで、提案されたプロジェクトをどうやって実現させていくかというようなことで研究会を設立したり、いろいろな分析をやったり、大きく2つの取り組みを3年目にやったということです。

国の事業を導入した最初の事業は、「まりも家族手形」です。後でお話しいたきますけれども、これが非常にうまくいったということがあります。それから、財源の問題は、どこの温泉地についても共通する課題かと思います。入湯税の問題、あるいは新しい財源ですね。地方税課税自主権の問題等、いろいろ考えていかなければいけないということで研究会を設置したり、そんなことをやってきております。花づくりのガイドをつくったり、先ほどお話しした国立公園の湖畔の整備をどうやって早急に進めていくかということで、このランドデザイン懇談会という懇談会を行いました。これは環境庁のOBのある先生をお呼びして、いろいろな知恵を授けていただいたということでございます。

後でお話があるかと思いますが、今は少し課題になっているところでございます。

花づくりをもっと体系的に進めていこうよということで、花づくりガイドというものをつくって全戸に配布したこともございます。これはランドデザイン懇談会です。

3年間で終わって、まださらにドライブをかけたいなということで、当初は3年間の予定だったのですが、それ以降も私自身も皆さんとやっていくのが非常に面白くなってしましまして、何とか会社からもお金を出させて取り組みをしたということなのですが、「まりも家族手形のバージョン2（まりも家族手形 stepⅡ）」、それから商店街の活性化として、「一店逸品運動」。実はこの2つのプロジェクトはあまりうまくいってなかったということがあります。時間があれば、後で理由もお話したいと思います。その下に、滞在プログラムのパンフレット、これが皆様のお手元に「阿寒湖温泉あなたがつくる時間割」ということでお配りしていると思いますけれども、これはなかなか評判が良かったと思います。阿寒に来ていらっしゃる方が、2時間あったら今の季節だったらこんなことができるよ。4時間あったらこんなことができるよということで、時間別に体験できるメニューをまとめたパンフレットになっています。

それから駐車場の問題です。路上駐車が多いということで、交通の社会実験の一手手前といいますか、そんなこともやりました。後で写真をお見せしますが、足湯、あるいは手湯が温泉街の中に徐々に整備されていくというようなこともございました。そんなことを3年目、4年目ということでやらせていただいたということです。この左側が先ほどご視察いただいた松岡理事長がおつくりになった足湯でございます。

2004年度、昨年度になりますけれども、温泉街全体の顧客満足度を調べるようなシステムができないかということで、都市再生の事業をこの年から温泉地にも使えるということで申請をいたしました。個々の旅館ベースで顧客満足度を調査するのはあるのでしょうか、温泉街全体でやってみようというシステムをつくっております。それから釧路開発建設部さんの全面的なご協力をいただいて、交通マナーの改善のキャンペーンも昨年度やらせていただきました。

それからもう1つ、大きいのは、これもお手元にお配りしてはいますが、つくったプランがその後、どう実現していくのか。3年たってきちんと見直ししましょうよと。見直して、また新たな第2期計画をつくりましょうよというような仕掛けにしておいて、2004年度はたまたま3年目ということで、今までやってきたプロジェクトがどのくらい進捗したのか。それから、そういった取り組みを住民の皆さんはどういうふうに見ているのか。あるいはキーマンの方々がどう感じているのかということヒアリングして、それをもとに第2期計画をつくりました。お手元に黄色い冊子のものがお配りされているかと思いますが、それを昨年度やったということでございます。これがまるごとマーケティングシステムですね。

これは、携帯電話でデータが入るようになっております。それから交通システムの協議会を設置して、交通マナー改善のキャンペーンをやったと。これもやってみているいろいろな課題、問題が出てきておいて、後で地元の皆さんからお話があるかと思えます。組織の設立といえますか、NPO法人化、後でお話があるかと思えます。

見直しの話ですけれども、最初の2010プランの中に、3年ごとに評価をして適切な見直しをしていこうということで、3年たって、今年、2005年度から第2期計画に入っているわけですけれども、そのプランをつくるというのは2004年度にやっております。そのときのアンケート調査とか、そういったものがお手元の参考資料に入っていると思いますので、後ほどご覧ください。2期計画のプランは、基本戦略を5つにしてやろうということになっております。

今年、2005年度ですけれども、国土交通省のシーニック・バイ・ウェイの事務局をNPO法人がやられています。これは昨日でしょうか、一昨日でしょうか。国土交通省の観光部門が今年設置をした観光ルネサンス事業という事業がございますけれども、その全国13カ所の1つに採択をされました。それからこの夏にやっておりました「阿寒湖温泉賑わいのまちづくり」は、温泉街の中を循環バスが走るというような社会実験ですけれどもそんなことをやっています。移動観光案内所、これはiワゴンと称して、これはこれからですけれどもそんなこと。それから5年間の総括の座談会をやっているということで、今年度はやっているということでございます。こういったバスがこの夏、走っていたわけです。右の写真はオープンカフェです。そういった事業と3年目にやったまりも家族手形をセットにして「賑わいのまちづくり」の実験をやったということでございます。

こういった6年間の取り組みを少しまとめてみます。ちょっと繰り返しになりますけれども、キーワードがいくつかあるのかなと思います。1つは、計画の策定を住民参加でやっていくというやり方。都市ではしょっちゅうやられているかと思いますが、なかなか観光地ではやれなかったということで、そういったことが主体的な事業の担い手として住民が参加してくれたという要因になっているのかなと思います。それから2つ目は情報公開。これは先ほどお話ししました。3つ目は推進組織。既存の組織がたくさんあるわけですが、その中でまちづくりをやっていく組織というのはなかなかなくて、それを

きちんとやっていったということが、やはり今回の阿寒のキーワードかなと思います。それから4つ目、恵まれた人材ということで、これはやはり内部にも優れた方がいらっしゃいましたし、ここにはカリスマ、それから地元の取りまとめ役の人格者がいらっしゃいます。事務局にも恵まれております。行政、これは町長以下の皆さんのこと。それから女性、これは、まりも倶楽部の方々のことです。内部、それから外部、ここにありますが、いろいろな大学の先生、それから船曳さん、これはJASの前の社長でございますけども、そういった方々にご協力いただいてやってきたということです。私が思いますに、やはり外部の方々の意見を非常に素直に取り入れてくれたということが、阿寒のこのまちづくりの特徴だったのかなと思います。

それからパワーポイントにはしていませんけれども、5つ目として、やはり阿寒湖温泉というコミュニティとして将来ビジョンを持ったということが、やはり重要だったのかなと思います。合併後にもやはりこれが生きていくのかなと思っていて、この5つぐらいがキーワードになるのかなと考えています。

私のほうから雑ぱくですけれども以上とさせていただきます。

○委員長 ありがとうございます。それでは、地元の有識者の方々からお話をいただきたいと思えます。

○ゲスト 今、委員からお話をさせていただいた部分がたくさんございましたので、簡単な形でご説明をさせていただきます。

まず私が今ここで申し上げたいことは、まちづくりをするという時点で、実は、阿寒湖には観光協会というものがございまして、イベント、要するにお客様を集客するという部分で大変大きな力を発揮しておりました。ただ、その時点でまちの中のいろいろなインフラの部分ですとか、それから将来は合併があるよとか、道州制があるよとか、いろいろな環境ですね。このことを昭和60年、平成元年ぐらいから随分いろいろな方に教えていただく機会が増えました。そのときに、先ほどの委員の上司の方にきっかけをつくっていただいて、まちづくりの部分になってきたというわけでございます。

こちらのパワーポイントにもございますけれども、国立公園観光地のあり方を学ぶために、先進地であるカナダ、バンフ、ジャスパー、ロッキー山脈を越えてまいりました。実は、その前に長浜、琵琶湖周辺ですとか、湯布院ですとか、そういった所も勉強に行かせていただきました。そこに行って感じたことが、ようするにまち自体で、住民自体で、小さい子からお年寄りまで、プラチナと言われるような名前があるような組織をつくったりとか、そういう活動をしているのを目の当たりにしてまいりました。

そして、今回の海外に行くという機会を与えられて、行ったときに、行政の仕組みを随分勉強させられました。ようするにカナダの場合は、観光局という形で、国があって、州があって、連邦政府があって、そして自治体がある。この仕組みを随分教えていただいた部分がございまして、もちろん花がきれいだったり、道路の作り方があったり、環境を整備したり、そういうのもありましたけれども、僕は、その辺に大変興味を持ちました。先

ほども言いましたように、この参加者 13 名の中で一応核的な部分、女性の部分ですとか、私を含めて活動する人間が少し出来上がったのではないかと考えております。

それからいかにせん、数字というか、裏付けする部分が非常に阿寒湖には少のうございました。入湯税から換算する入り込み人数、日帰り客の人数というのはございますけれども、実際にお客様がどういうふうにして阿寒湖温泉街を訪れているのかということ把握するすべがございました。それで先ほど、内閣府で実施している全国都市再生の事業につながるのですけれども、本当に、宿泊のお客さんを道路やいろいろな所でアンケートを取るという行為をいたしました。それから住民の意識を問うという調査もいたしました。

今までアンケートは、「どこどこに何々をつくるけど、皆さん、どう思いますか」というアンケート調査はあるんですけれども、実際に自分が住んでいる町、村で、どういうふうにして今後していったらいいのかというアンケートはなかなかなかったものですから、それも先ほど申しましたように裏付けという部分の中で、5年間、6年間のまちづくりに役立ってきたと考えております。これは、最終的には2回、3回、繰り広げることになっております。もちろんお客様のほうも先ほど携帯電話を使ったりという部分がありましたね、あれと同じように使われるようになりました。

それでまちづくり推進機構、まちづくり協議会の設立でございますが、実はお手元に大きなA3の資料があって、今日はこのライトをダウンしてしまったものですから見えないのですけれども、当初、まちづくり部会という組織をつくって、それは阿寒湖温泉だけではなくて、阿寒町の建設業界の方も入れたり、農業団体の方も入れたりして、先ほど70、80名と委員が言われたように、大きな組織をつくりました。それがだんだん集約していったという形で考えていただければ結構です。大変すみませんが、その資料は後ほど見ていただきたいと考えております。

それからもう1つ、外部の先生方に言われたことがありました。さっきバイブルの横に小さな冊子があったと思うんですが、あそこに書いてあるのですが、ある先生が阿寒湖温泉の会議に出たときに、全員ねずみ色か紺色の背広でぐるっと囲んだのです。「このまちには女性がいないのか」みたいな雰囲気で行われました。やはり旧態依然とした温泉観光地の、温泉場の会議だというような意思表示だと思います。その後、自主的にまりも倶楽部という約70名の女性の会が立ち上がりました。今日は代表が来ておりますので、後ほどお話をさせていただきます。立ち上げのときの新聞がお手元に置いてございます。

それからまちづくり推進組織ができました。ところが実際の話、何をやっていいのかわからないというのがございました。梅川先生からもいろいろと教を請うのですが、では何をやったらいいのかというので、随分悩みました。取っ掛かりにできたのが、「できることから」という言葉です。シンボル事業として今なっておりますけれども、花いっぱい運動という形です。阿寒湖温泉街には正直言って、お花はどこにもなかったです。土地を持っている人はネコの額ほどの所で、草花を植えたりしてはございましたが、お花を飾るという

よりも商売のほうが忙しくて、そういう行為がなかったんですね。ですからゆとりですとか、のんびりするという、お客様にくつろいでいただくような雰囲気がなかったのが、先ほども見ていただきましたように商店街にベンチを置いたり、お花を置いたりする花いっぱい運動につながっております。これは、国道沿いに釧路開発建設部さんのご協力をいただきまして、お花を植えております。あの一環の事業と同じように街中に入ってきてもとというスタイルがございます。

これが最初の事業で花いっぱいプロジェクトという形で、ちょっとこれは英国風の、何をやっていか分らないというときで、ハーブガーデンなんていうことをちょっとやってみて、今現在、ここでは手を加えていないのですけれども、ここで株分けをしたものを中学校の校庭に持って行ったりして、活動は続いております。このお話も後ほど మరి 俱樂部の方からあると思います。

それからこれも先ほど委員が言われたような、温泉の花づくりなんていう、どこの温泉地に行っても当たり前にあったものが阿寒湖温泉にはなかったのです。実際に阿寒湖温泉でこういうものをつくってみると、花をつくるのが好きな人はたくさんいらっしゃった。こういうことも分かったのです。ちょっと余談ですけれども、今回も観光ルネサンス事業で外客を誘致するといったら外国語をしゃべれる人をちょっと探したわけです。そうしたら英検の1級を持っている人が何人かいらっしゃるのです。その人たちは、自分の店の商売だけで活用しているのですけれども、こういうように花づくりもそうなんです。やはり埋もれている人材がたくさんいるということ、まちづくりをして初めて知ったというか、分かったということでございます。

それから今日同席しております者と各町内会を回らせていただきました。商売をやっている。こちらの通りは夜が忙しい商店街ですので昼間、午前中やっている。それから先ほどの湖岸園地のエコミュージアムのほうの商店街は、昼間が忙しいですから夜に行きました。それからアイヌコタンのほうにも商店街がございますので、そちらのほうは10時半とか、11時に行きました。そういった形で皆さんにご説明をさせていただいたということなんです。これはニュースレターをもってしてもあれなのですが、やはり広報を出すということがそのまちを宣伝する。それから自分たちのやっていることを住民に知らせる。ニセコの逢坂町長さんの広報の仕方を見ていると、大変住民に分かりやすい広報の仕方をしています。だからああいった事業を展開するときにはいいんだなというヒントをもらったような気もしておりました。

これが先ほど、委員が言ったバイブルです。本当にこれがボロボロになるまで読ませていただいたのですが、大変、私にとってみれば、計画を立ててやるというのは、銀行に出す計画書ぐらいなものでまちづくりの計画書というのは本当につくったことがなくて。ましてや私が商売をしていたときには、短期計画が当たり前だったのですけれども、このプランは10年計画で2010年までの計画を立てると。これは果たしてできるのかなと思いつながら、これを毎日読ませていただきました。

それからもう1つ、お話をしなければならぬのが、先ほどよりも家族手形という話が出ました。皆様もご存じのとおり、聞かれるとおりに、全国の温泉地に行きますと、囲い込みという言葉が非常に横行したときがありました。今は観光温泉街におきましては、囲い込みという言葉が随分聞かれなくなりました。それはなぜかといいますと、このよりも家族手形というものをつくってから、ホテルの中でこの手形をお客様に無料でお分けする。それを持ったお客様が商店街に出てくるという循環が大変素晴らしいことができたなど自分でも思っております。ただ、これを運営していくのに、私どもの基盤というか、財源力の少なさという部分で、これを維持していくのに何百万円というお金がかかりますので、最初の年は支援をいただいていたのですが、2年目、3年目のときにやはり無料というのはなかなかできなくて、有料化したことによって上手に進まなかったということがあります。

ただし、今年また国交省のおかげで、社会実験をすることができました。循環バスを走らせることができました。このときに、再度このよりも家族手形を復活させていただきました。ようするに駐車券代わりですね。それで観光客の方々が温泉街をかつぽしてくれたと。でも今年は、おかげさまで8月、9月、10月で自分たちの予想していたよりもはるかに多い7,700名という方が、小さな16人乗りのバスに乗っていただいたということがございます。これもやはり家族手形という部分の一連のものから来ている効果ではないかと思っております。これがその当時の家族手当でございます。

ここの部分につきましてもちょっとお話しさせていただきます。これはまちづくり協議会の設立でございます。今、主要組織と小さく書いてございますが、21の団体が阿寒湖温泉街にございます。最初にまちづくりをしたときに、この組織全部から1人ずつの皆さんを選ぶといたら失礼ですけれども、来ていただいてまちづくりをしました。でもよく考えて話し合っていくと、やはり、よく「よそ者」とか「ばか者」という言葉がありますけれども、まちづくりに熱心な人が残ってくれたほうがいい。乱暴な言い方をすると、バスは走り出す。乗る人は乗ってくれ。乗らない人は乗らなくてもいいと。ただし、循環しているからまた戻ったときに乗ればいいよ。それは10年後に来るかもしれませんし、5年後かもしれない。とにかく今、まちづくりを始めなくてはいけないということで、このまちづくり協議会には21の団体がありましたけれどもつくりました。

主体ですね。要するにどういうふうに進めていったらこの計画が進んでいくかということ、最後の梅川先生のパワーポイントの説明にもありましたように、核になる人たちがやっていかななくてはならないということに気がつきました。それで今回、釧路市と合併したときも、僕は昨日も都市計画の方が来てお話をいただいたときに、あの後ずっと考えていたのです。これを上手に進めるためにはどうしたらいいのだろうか。また、全部の二十何団体を集めて、皆さんのお話を1人2、3分ずつ、5分ずつ聞くのがベストなのか。また、次の機会にというお話をしたほうがいいのか。その進め方がやはりもう1回これでリセットだな。もう1回ここでまちづくりの話をしなければならぬなというこ

とがありますので、やはり少数精鋭で、短期でやることは進めていくというような、「推進主体の明確化」とここに書いていますけれども、ここが大事ではないかと思っております。

これで最後になります。先ほどもお話ししたように、観光とまちづくりが合体している町村、温泉地は非常に少のうございます。やはり進む方向が違うとはっきり言ったほうがいいと思います。観光客のためにつくるまちと、自分たち住民のためにつくるまち。湯布院のように訪れる人、自分たちが住んでいていいまちは、当然観光客にもいいんだというまちも確かにあります。ただ、この阿寒湖温泉はなかなかそういうふうにはまいません。ですから両方がいいうにするという方法を今模索している最中です。そのためには、いろいろな機関からの支援もございます。ただ、それを受けるために、やはり日本の法律的には法人化して社会的な信用を取って、組織の基盤を明確にしておかなければ駄目でしょうということで、今年7月に法人化をさせていただきました。

最初、前段で申し上げましたように市町村合併のことを平成元年ぐらい、それから道州制のことももちろんそうですけれども、これから国がどんどん、どんどん変わっていくのに、この一地方の温泉場で情報をいち早くいただいて、まちづくりの仕組みを変えていかなければならないという、われわれは本当に小さなまちですけれども、そういうふうな気持ちで今のまちづくりを進めている次第でございます。

この機能、予算、財産等の効率化というのがあります。これは小さなお店をやっているのとは違いますので、やはり大きな本体、オール阿寒というものを運営、経営していかななくてはなりませんので、われわれに今必要なのは人材だと思っています。私の組織の中の職員もいるんですけれども、やはりもっといろいろなものにたけた方に来ていただいて、阿寒湖のためにまちづくりをしていただければという気持ちでおります。何か最後、感想のようになってしまいましたけれども、こういう内容でございます。以上でございます。

○委員長 どうもありがとうございました。

○ゲスト 私たちまりも倶楽部は、2001年まちづくり協議会のプロジェクトの中にメンバーとして女性が何人か入っていました。そのメンバーの中の女性たちが、「何か、自分たちでできることがあればいいね」なんていうお話をしていましたところ、ちょうど先ほど梅川先生がおっしゃっていました外部の有識者であります余暇コーディネーターのゆとり研究所の野口先生という女性の検討委員会の先生がバックアップしてくださり、当時、年4回ほどのペースで大体2年間アドバイスをいただきながらの発足となりました。活動するにあたり、当時、私たち立ち上げのときは25名ほどのメンバーだったのですが、その中からやりくりができるようにと多めの構成をしまして事務局を2人、副部長を4名、部長を1名ということで、普通でしたら年功序列ではなく、肩書でもない。そういうメンバーの中から若手といいましたらあれですけれども、順番に役をつけさせていただいて、私たちより少し年齢の高いお母さんたちは、私たちの背中をちょっと押してくださるような、そういう役目に回ってくださることになりました。今は、56名の部員がいます。

先ほどからボランティアグループと言ってくくださったのですけれども、実は、ボランテ

ィアという言葉でしたら私たちちょっと気恥ずかしいというか、くすぐったいような気持ちでいたんです。私たちの意識の中では、本当に自分たちのためにやりたいと思って活動を始めたので、一番、自分たちがやってみたいこと、必要だと思うこと、できそうだと思うこと。これをキーワードに、本当に空いている時間に、無理をせず楽しみながら活動しています。

私たち、阿寒湖のこういう観光地に住んでいるんですけども、土地全体が観光地ということで、同業者の方もたくさんいらっしゃいますから、お隣のお店に入るとか、ここのホテルのお風呂に入浴させていただくということ、そういうチャンスがなかなかなかったのです。それで「何かやりたいことは？」というふうにみんなに聞きましたところ、四季を通してのまち歩きがしてみたい。観光客の方とおしゃべりをしてガイドブックにないスポットを教えてあげたい。阿寒でしか食べられない何かをみんなで作ったり、食べたりしたいという、たくさんのやりたいことですか、そういう本当に今必要で、すぐに行動に移し、やれることということで、こちらの白い手づくりマップを一番初めにつくりました。立ち上げが11月だったということもありますけれども、雪まみれになっての研修をしたり、まち歩きを繰り返してはリポート、文章など、私たち本当に主婦ですので書いたことがなかったんですけども、みんながいろいろな言葉と絵を描きました。こちらのほうに載っていますけれども、釣りをしている人の絵、歩くスキーをしている人の絵、あとは温泉の絵なんかも、全部、各メンバーが自分たちで描いたのを切り張りしながらつくりました。そういうふうに自分たちが一つ一つ描いたものがこういう形になったものですから、本当にその喜びというのは、これを持って皆さんに伝えて歩きたいという気持ちがすごく出たんです。

こちらの阿寒湖温泉ホワイトマップの下のほうに「ドラム缶」と書いて、「ここも温泉です」と書いてあるところがありますよね。こちらが今は手湯になりました。皆さん、自宅で温泉を引いてその捨て湯を外に出していたんですけども、地図に載せたら、まず最初に色が変わりました。汚い色だったのがブルーに変身しました。そして次の年には、これが手湯に変わりました。というふうに、何かみんなの気持ちの中に、少しずつそういう意識が芽生えてきました。

こういうマップをつくる中で、前田一步園さんのおかげで私たちは自然を大切にすることを知ったり、まりもの研修で学芸員の皆さんに教わったり、各ホテルのご厚意でお風呂の入浴の体験をさせていただいたり、遊覧船やモーターボートに乗せていただきました。また、阿寒に住んでいて20年ぶりに体験したというメンバーのこの感激と驚き、そして、食べることが大好きな私たちにこの地元で捕れていますワカサギをはじめ、原産地でありますヒメマス、また京都などで有名なフランス料理のお店で使ってくださっているというウチダザリガニなんかを提供してくださった漁業組合さん。また、各ホテルの調理師組合さんが料理での交流を申し出てくださったり、猟友会さんからはシカ肉のご提供で、シカ肉ラーメンの開発を私たちはすることができました。

本当に地元のたくさんのご支援がありまして、こちらの『まりも倶楽部の料理レシピ』をつくることができました。そして私たちは、家庭を持つ一人の女性なので、倶楽部に入ってから出産をしたり、子育てをしたり、また、一生懸命介護をしているメンバーなどがあります。一人一人の時間差ですとか、温度差を認識することは、参加に対して絶対に強要、強制しないということにつながっています。また、みんなが子育てをしたりしていることを前提に子育て支援をしたり、介護の問題などに取り組みたいなという、私たちの必要だと思ふということにもつながってきました。

そして今できる環境、今やれる状況、そのときの自分の暮らしに合わせて参加しているのですから、皆さんに片身の狭い思いをさせないようにと事務局が本当に地道な努力をしてくれていまして、私たちの活動報告を随時メンバーに報告してくれております。こちらの活動報告です。それと事務局の1人が釧路新聞社さんよりコラム欄をいただきまして、「まりもな時間」という活動報告を、毎週火曜日に67回にわたって連載をさせていただきました。これが、本当に私たちが何をしているかというのを皆さんに知っていただく大きな力になったと思います。

最後に、私たちには協議会のときにつくられました、こちらの「まりも家族憲章」。まりも倶楽部のほうではなくて違うほうの部会に入っているんですけども、こちらの「まりも家族憲章」というバイブルがあります。私たちもやはり家族ですとか、みんなに支えられ、特に私なんかは、主人の父がこの阿寒の時代を築き上げた1人のリーダーでもありましたので、その父のお仲間のおつながりですとか、いろいろな皆さんからのアドバイスを受けることができました。倶楽部のみんながそうであるように、やはり家庭の温かいバックアップに支えられていると思います。

この阿寒湖を愛する心が今度は自分の子どもたちに伝わっていくように。土地柄、一度はここはへき地なものですから学校などで子どもたちがよそに行くことが多いんですけども、どの子に聞いてもあだ名は「まりも」です。「まりも君」「まりもちゃん」と呼ばれていると言います。それはやはり子どもたちも阿寒湖で生まれて育ったという意識があるのでそういうあだ名になっていると思います。その子どもたちがここに帰ってきたいと思ってくれる土地になれるように、私たちが住みやすいということは、それは皆さん方、観光客の皆さんが訪れてくださる優しい阿寒湖になれるように、私たちは頑張りたいと思っています。こちらの最後に書いてありますけれども、「まりものようにまあく仲良く生きるために」これからも活動を続けていきたいと思っております。ありがとうございます。

○委員長 はい。ありがとうございました。

○ゲスト 私たちは結婚を機会にこちらの土地に移り住んだ側です。私たちがささいなことでもとても新鮮に思えるようなことを、地元の方が普段、当たり前になってしまって忘れてしまっていることなどがたくさんあるなと感じました。私たちもこちらに骨を埋めるつもりでまいりましたので、阿寒のいいところをやはり知りたい。また、その知ったことを広めていきたいという気持ちがありまして、このまりも倶楽部は、最初暴走というか、走

り続けてきたように思います。

やはり私たちが知りたくて、こんなものが阿寒にあるのにどうしてそれをアピールしていかないのかなということをととてもたくさん感じました。そういうことをやはり女性の中で聞きながら、教えていただきながら地元の食、また、この阿寒の地方でしか育たない花だとか、そういったものを知るきっかけにもなったんです。観光に携わっている人間が多いので、そういったものを内外に広めていき、語り伝えていくことによって同じような気持ちの仲間が増えたり、また女性ですから家庭の中でも、主人ですとか、子どもたちとも話をしていくうちに、主人から、子どもたちから意識が変わってきたようにも感じています。そういったものがどんどん回り巡ってというか、女性特有のおしゃべりで広めていくという活動ができたのではないかと感じております。そういった地道な活動の中から、自分たちからは思いも掛けないようなところから取材をいただいたりですとか、また、食のアメニティのコンテストとか、そういったものに参加できる機会もございまして、外に出て行くようになりました。外に出たときに、自分たちが食べたいと思って頑張っつつくっているヒメマスご飯ですとか、ザリガニのお料理なんかはかなり新鮮に皆さん興味を持ってくださるということをあらためて感じました。これを地元ももっと自分たちの資源というか、宝物だということ認識しながら活動していかなければいけないなという、また新たな責任感も感じながら帰ってきたわけです。

こういう地域の団体が活動していく上で、ずっと感じていることなんですけれども、地元に対する愛着ですとか、自負ですとか、そういったものが一番大切ではないかと思うんです。そういった気持ちを持ちながら話をしていくことによって思いが伝わるといふか、そういったことで仲間が増え、また協力者も増えました。そして子どもたちも一度は阿寒を出ることになってしまうんですけれども、子どもたちの中に根付いて、この阿寒に戻って自分たちのできることを探したいという気持ちで戻ってこれるような土地柄にどんどん私たちがしていかなければいけないなという。これは、やはり地元地に足つけて生活をしている女性の役割ではないかとすごく感じながら活動しております。

今後は、少しみんな忙しいので部会を設けました。先ほど言っていました花いっぱい運動のほうですけれども、地元で花を育て続けて、この土地でしか育たないですとか、阿寒に似合う花があると皆さん思っているんですね。そういったものを今年の4月から中学校の校庭を少し借りまして、そちらで園芸部の活動を中学生たちと続けてきました。収穫をしたり、阿寒湖に似合う花、玉咲き桜草という春一番に咲く、とてもかわいい花の株を増やして、阿寒湖中にその玉咲き桜草を増やしていきたいねということで、今年1年活動してまいりました。

1年活動し続けられたということがまた自信につながりまして、来年からも同じ活動をしていきたいと思っております。またこの花に関して広まったのが、お年寄りなのです。一人暮らしのお年寄りの方で野菜を育てたり、花を育てたりするのが好きな方たちが、一人一人地道に活動はしていられたのですけれども、その中学校の畑で野菜を育てるにあたって声

を掛けたところ、皆さんすごく楽しみにしてくださって、「週1回の活動が待ち遠しくて仕方がない」と言ってくくださるようになりました。今まで知らなかった方たちとの交流も増え、珍しい種の交換をしたり、こういったことをしたらよく育ったとか、そういったささいな話の中からお友達が増えたりして、ぜひ来年も参加したいというお声もいただきました。これこそ地域に根付いた活動だなと思っています。昨日一応終了会をしたんですけれども、私もすごく良かったなと感じておりました。

今後にもこのように人の輪を広げたり、また人の意識を変えたり、仲間を増やしたりということは、やはり女性の何にもしばられないおしゃべりのおかげかなと思うので、今後地元に対する愛着を持ちながら、おしゃべりをしながら活動していきたいと思っています。以上です。ありがとうございます。

○委員長 大変楽しい話をいただきましてありがとうございます。

○ゲスト NPO法人の代表させていただきます。本日は第1回ということで、大変名誉ある会議を阿寒湖でお開きいただきまして、誠にありがとうございます。

私どもにいただきましたテーマは、2つございます。まちづくりへの取り組みにあたって、観光業者はどのように参加、関与しましたかということと、もう1つがまちづくりへの取り組み前と取り組み後で経営のあり方がどのように変わりましたかという題をいただいております。

私どものまちづくりがこうやって注目をしていただける原因になっている2つといたしましては、まず阿寒湖には本日の専門委員会の会場であります当館の経営者であります大西さん、観光カリスマでもあり非常に立派なリーダーです。また、このまちづくりのいろいろな取り組みを始めたときに、JTBFさんという、観光のスペシャリストのご指導をいただけるということが、今まで長く続いてきている、あるいは活動が活発になっているという大きな原因になっているかと思えます。あわせてこの阿寒湖のまちづくりには、環境省、それから国土交通省、あるいは北海道開発局さんなりという、行政のご協力、あるいは叱咤激励。阿寒町の中島前町長さんもいらっしゃるんですが、非常に後ろ押しもたくさんいただいているということが、非常に今、私どもにとっては大変幸せだなと思っています。

私どものこの阿寒湖畔は、先ほども説明がありましたが1,800名ぐらいの人口で、その中のお子さまですとか、小さい方を別にいたしまして、観光の取り扱いをしている業者がほとんどでございます。8割、9割が観光業者だと思います。したがって、この阿寒湖の推進の母体といたしましては、阿寒観光協会という形の中で、そこに127軒ぐらいの観光に携わっているほとんどの業界の皆さん方が加盟している任意団体がございました。これが将来を見据えまして先ほどあったとおり、合併ですとか、あるいはこれから指定管理者等も含めていって、いろいろな国の施策を取り入れるためには、任意団体からこの法人格を持ったNPOという形の中で進んでいくことによって、きちんとその事業を受けやすいということで、NPO法人を立ち上げたということになっております。

したがいまして、このまちづくり協議会、あるいはNPO法人を立ち上げていく段階といたしましては、それほど苦勞というのはなかったように感じております。ただ、その関心度という部分として、任意団体のときには、どうしても観光協会の理事の役員さんだけが、このまちのいろいろな行事等々を進めていくという形から、まちづくり協議会になりまして、あるいはNPOになりまして、それぞれ3つの大きな組織に分かれて、今ほとんどその組織がきちんと動き始めていって、むしろ役員よりもその委員会が非常に活発に動いているという感じを受けております。

そのような形の中でずっと進んできていますが、実際にまちづくり、あるいはNPOがスタートして、どんなところが変わったのかということ等々に関しましては、なかなかまだこれといった成果というか、実感で感じるものはないかと思うのですが、このまちづくりのスタート時点で、できるところから手をつけていくという形の中で、やはり先ほど発表していただきましたまりも倶楽部の女性の皆さん方の活動、あるいはこのまちづくり協議会の中でも若い方々の組織がしっかりと固まってきて、非常に今、まちづくりが活性化している。むしろ私ども理事のほうが、最近、ルネサンスだとか、シーニック・バイ・ウェイだとか、いろいろな社会実験等々が出てきて理解しにくくなりつつあるのですが、そういう部分といたしましては、やはり軟らかい頭の皆さん方にきちんと動いていただいているという形の中で、私どもはこれからもまい進していきたいと思っています。

私どものグループは、皆さん話が大変上手でございまして、理事長の私が一番下手くそでございます。そんなことで、2つのテーマにつきましては、今、お話ししたとおりです。あと最後にもう1つだけつけ加えておきたいと思うのは、観光地はイベント、お祭りがイコールお客さんを集客するイベントになっていくんですが、このイベントが、普通のまち場の2日、3日というイベントではお客さんに来ていただくことができないものですから、常に阿寒湖のイベント、お祭りは、ロングランになっていきます。代表的な氷上フェスティバルは1月25日から3月25日。あるいは、この秋に開催されていますイヨマンテの火まつりというイベントは、10月10日から12月5日まで。それから春先にあります、ユーカラ劇ですとか、そういうお祭り関係がロングに組んでいるということで、どうしても連携という部分として、地元の皆さんがほとんど参加していくということで、つながりがうまくいっているのかなと考えられます。

以上、雑ぱくでございますが終わらせていただきます。ありがとうございました。

○委員長 ありがとうございます。

○ゲスト 今日、委員の皆さん、大変お忙しい中、はるばるこちらまでお越しいただきまして実情を聞いていただけということで、大変ありがたく思っております。それとあわせて、先ほど事務局より、全国総合計画が国土形成計画にかわるというお話を聞きました。これは、われわれの地区としては大変素晴らしいことだと思っております。

と申しますのは、私は昭和6年生まれです。そして釧路で生まれましたけれども物心ついたときには東京にいました。昭和20年の大空襲で学校にも行けなくなって、焼け野原

になって、おやじ、おふくろとともにこの阿寒、本町のほうに引き揚げてまいりました。そして、昭和 26 年からこの阿寒湖畔でお世話になっております。その 26 年当時は、私は釧路と阿寒湖畔の定期貨物の助手、そして運転手をさせていただきました。大体 11 月 1 日までに一冬分の食糧をここまで運ぶのが最後の仕事でございました。というのは、当時は戸数が 54 戸、人口が大体 600 人ぐらいですか。その一冬分の米、みそ、しょうゆ、焼酎、お酒というものを運んでしまい終えると、冬の間、陸の孤島になってしまうわけです。そういう状態が 30 年ぐらいまで続きましたかね。それから機械の発達によって少しずつ除雪されながら、年間通して生活できるようになったのが大体昭和 33 年ごろだったと思っております。そのころ私は地元の女性にほれまして、ここに定着することになりました。以来、五十数年、ここに住ませていただいております。

その間、いろいろこの観光の発展が少しずつ、少しずつあれしてきたんですけども、当時は、11 月の第 1 日曜日、この日がまりも祭り。まりもの保護とともに今まで無断で持っていったまりものを全国的に回収して、保護しようという保護運動が始まりました。それを基調としてまりも祭りが昭和 25 年からできまして、今年で第 56 回目を終わらせたわけでございます。まりも祭りが終わると、ホテル、あるいは旅館の番頭さんとか、メードさんがほかの観光地、熱海に行ったり、鬼怒川に行ったりというような形でみんな帰ってしまうのです。長い間の冬眠、言うなれば、でかんしょ観光でございましたが、考えてみたらその当時のほうが気が楽だったかなという感じがしております。

そういう中で、ずっと続いてきているうちに、夏は本当にお客さんに来ていただきました。「君の名は」のラジオですか、テレビですか、あれしたときには、本当に美幌の駅から横断道路を通って、この阿寒湖まで来る定期バスが多いときでは、16 台、20 台がびっちり満員になって、それだけのお客さんが来るのが普通でありました。そして、それとともに、この阿寒湖が汚染し出しました。そういうことから、なんだかんだ言っているうちに私もよそ者、ばか者の 1 人であったのですが、約 30 人ほどの会をつくりまして、このままでいいのかと。これだけのホテルを建てて、冬に寝かしておくのはもったいないじゃないか。冬、何かしようやということになりまして、その若者たちだけでこの寒さを利用して冬の氷祭りをやったわけです。

氷にかんなをかけまして、びたっと張り付けて、本当に大きなテレビの泉なんかをつかって自分たちでは素晴らしいものをつくったなと思うけれど、お客さんが来てくれないんです。それでそのうちに観光協会の予算を使いすぎて、ちょっと怒られましてやめようかと思ったこともございました。当時、東亜国内航空さんがやはり冬の観光に目をつけられて、近藤真彦と松本伊代を呼んで、ここで氷上祭りの最中にやってくれたのです。そうしたら来るは、来るは、来るは。1 万 2,000、1 万 3,000 人が来ました。僕がシャンシャン馬そりをやるので、そのシャンシャン馬そりに近藤真彦と松本伊代を乗せてあれしたら人が取り巻いてしまって、氷がミシミシと沈むぐらいお客さんが来たのです。それで、これはやりようによってはお客さんが来るんだという感じがいたしました。

それから4、5年、航空会社とタイアップしてやっているうちに、冬のお客様が徐々に増えてまいりました。そして現在では、はっきり申し上げますけれども、夏それだけ来たお客さんより、冬のお客さんのほうの満員率のほうが多いのではないのでしょうか。これは、雪のない国の方々です。それだけやはり時代が変わってきているということでございます。

私もそんなことをやっているうちに、知らず知らず、昭和46年に「おまえ、議会議員に出れ」ということで、46年に議会議員に出まして、約8期、議会議員をやらせていただきました。副議長を2期8年、議長3期12年もやらせていただきましたので、平成14年の町長戦のときに、町長が苦しくなるの、厳しいのは分かっているから、本当はもう辞めるつもりでいたんです。そうしたらみんなが「おまえ、食い逃げだ。この厳しいのは、おまえが責任を取らなきゃいけないんだ」と言って、2年10カ月、町長という形で頑張らせていただきました。それで大局から見て、やはり合併しなくては駄目だということで、合併まで町民の皆さんに納得をいただきまして、この10月10日まで町長をやりました。

そして長い間、観光を見ますと、やはり先ほどからご説明があるように、1泊して夜泊まって朝早く立つ方が多いんです。だけど、これは長い目で見ますと、うちのまちは滞在していただいても、見ていただいても素晴らしい所があるんだけど、そういう所までお客様に見ていただけない歯がゆさがある。そういう歯がゆさを議長時代にあれしたときに、たまたま、JTBFの方から、「阿寒湖温泉は素晴らしいんだよ。もう1回、委員会をつくってプロジェクトしてみないか」というお話がございました。

実は、議長時代に3回やっています。雄別炭鉱が昭和45年に閉山しまして、それからグリーンタウン構想とかありましたが、みんなプランニングを立てたら終わりなのです。プランニングを立てるためのプランニングなら要らないんだという思いがございましたけれども、観光カリスマの大西さんが、当時はまだカリスマになっていませんけれど、フクロウみたいな目玉をして「おじさん」。50ですからね。僕がここに来たときに生まれたんだから、おじさんだわな。「おじさん、このままで阿寒湖はいいんですか。議長の責任をそれで果たせるんですか」なんて迫ってくるんですよ。だけど町長に話したって「金はない」と言うし、それから仕方ないからある方面に行って、ある程度お金をつくってきました。町というのはおかしなもので、そうやってつくってきても一般会計に入れてしまうと、議会の許可をもらわなかったら議長だからといって自由に使えないのです。「議長ばかり金を持っていく、持っていく」と言われるけれども、これは将来を考えたらやはり観光がうちの町の産業だと思いますので、私は頑張りました。

そういう中で地域の皆さんも応えてくれまして、私は本当に今までにない盛り上がりの委員会だったと思っております。そしてこの委員会ができたおかげで、自分たちが身の回りを店の先だけではなく、やはり阿寒湖というのはどういう町だろうかという見直しをしてもらったということと、それから全国の中で阿寒湖はどのような位置にあるんだ。お客様にどういう形で、何を提供すればいいんだという考えを持っていただきました。それとあわせて、開発途上国と言われておりました南の雪のない国の方々が、本当に大勢来ていた

だけののです。そして、ひどいときなんかですと、私が夜遅く役場の本庁から帰ってきますと、随分お客様が歩いているんですけど、歩いている方々がみんな中国語で、「ニーハオ、ニーハオ」という感じでなんだか台北へ行ったような感じがするんです。やり方によっては、雪というものを珍しく思っただけ。そして雪というものに関心を持って、寒い地区に関心を持っただけの時代が来たなど。やはり地域としては観光を中心にして盛り上げていって、地域づくりをするべきだなと思っておりました。

そういう中で、本当に官庁の皆様のご支援も随分変わっていただきました。今までは、「何とかお願いします。お願いします」という陳情の中でもなかなか実現しないものが、今度は一歩も二歩も前に出てきていただいて、「こういうことはどうだろう」「ああいうことはどうだろう」という、全国的な視野の中でご指導をいただいていると。そういうのがやはり国土形成に将来つながるのかなという感じがしております。

はっきり申し上げますけれども、昭和46年に雄別炭鉱が閉山して産炭地域振興特別措置法ができたときに、通産関係の予算ですから観光には全然使えないのです。産炭地域振興事業団という1つの産炭地を助ける金融機関がございましたけれど、観光には全然使えない。その当時まで観光という産業は、不要不急の産業であるという感じで見られておりました。しかし、52、53年ごろからやっと地域振興のためには観光も必要だということで、観光に対しても、こういうホテルに対しても融資をいただけるようになりましたし、補助をいただけるようになりました。そういう面で、今後、この国土の形を変えていくということになったときに、成熟社会になったときに、やはり私はその地域の文化、観光というものは、非常に大きな力を果たすものだと思っております。少子高齢化になったときに、子どもたちが誇りを持って「おれたちは、阿寒に戻っていくんだ」。そのために一時、都会なりなんりの社会を見ながら勉強しながら、必ず阿寒に戻るんだ」というような地域をつくっておかなければ、やはりある程度の年代になったら、よその人のお世話にならなければいけないような町になってしまう。これだけは絶対に避けたいという感じを持っております。

特にこれからの観光といいますか、地域づくりといいますか、やはりそれは私どものあれでは、もう東北海道全般、大きく考えていただきまして、知床も含める。そしてまた、釧路湿原国立公園も含める。大雪国立公園も含める。そして飛行場にいたしましても帯広、女満別、釧路、中標津の4カ所がございます。そういう空港の形態から、また、道路も大変良くなりました。おかげで、今までいつごろできるのかなと思っていた高速横断道路も新しく公団でなく新直轄という方法で、本別から釧路、阿寒まで通るようになりましたので、これも将来のこの地区の大きな活力になると思います。この地区自体の生き方も本町地区は酪農で十分成り立っていくと思います。観光を120%生かして、観光の波及効果を酪農にも水産にも、あるいはまた地域のブランドづくりにも結びつけていくこと自体が、地域の活性化につながると考えております。

今まで釧路の魚なんていうのは非常に大ざっぱでございまして、サンマにしてもサバに

も、イワシにしても、トラック1台いくらの単価でございます。これがある程度鮮度を保持し、そしてきちっとお客様に届ける形にすると1匹いくらの値段になるというようなことで、つくるものも、それから捕るものも付加価値をつけてどういうふうに地域の活性化に結びつけるか。観光というのはただ観光だけではなしに、そういう地域全体の産物の全国から来ていただける、そして国際からも来ていただけるお客様のショーウインドーであるというものの考え方を形成しながら進んでいくということが、これからのこの地域の生きる道ではないかと思っております。

そういう面で若い人たちが大変頑張っていただいておりますので、私も安心して引退できるかなという感じを持っております。また、国土交通省には、大変何かとお世話になっておりますし、環境省にもお世話になっております。そういう面で、今後ともまたよろしくご指導のほど。先生方の形成のほうにつきましても、観光というものの波及効果の大きさを十分形成しながら、今度は国土形成計画の中に盛り込んでいただければ、大変ありがたいと思います。

○委員長 どうもありがとうございました。内容もさることながら皆さんお人柄のにじんだ、大変いいお話をいただきました。ありがとうございました。

それでは、あと残りました時間、委員の方々から地元の方々へいろいろお聞きになりたいこともあると思いますので、引き続きよろしく願い申し上げます。

○委員 さっきから団塊の世代というのがたくさん出てきて、私はその団塊ジュニアになりましょうか。ちょうど年が35歳で、場合によったら一回り、二回りぐらいでしょうか、若い。まだ不勉強で、今日のことも非常に勉強になりました。

私も実は、こういう専門委員会に入っているんですけども、恥ずかしながらほとんど東京、神奈川暮らしです。最近でこそ北海道の仕事をいろいろやるようになったんですけど、まだほとんど、本当のこういう地域の問題を身をもって体験できない。まだ話を聞いているだけで、何となく耳年増になっているような感じで、いろいろ勉強させていただきたいなと思いました。

そうはいってもわれわれぐらいの世代になると、やはり自分が年を取ったときとか、自分の次の子どもたちの世代のときに、当然今までのようにやっていけない。いろいろな意味で人口ももっと減っていますし、そういう社会基盤整備等々、いろいろなものもどんどんしんどくなるということがどうも目に見えている中で、こういう分野に今の団塊の世代の方たちとはちょっと違う感触を持っています。

そういう中で阿寒の例題というのは、非常にいろいろな示唆を与えているなという感じがしております。特にまちづくりと観光振興が合体をして、先ほど話にありましたように、観光業界の人が大体このエリアに住んでいるほとんどの人だということで、まだ若干円滑に進んでいるのかなという気がしましたが、NPO法人化までして、非常に面白いなと思いました。このNPO法人について私も仕組みが不勉強でよく分からないのですが、当然活動にお金が必要なんですよね。先ほどから聞いていますと、いろいろな補助事業とか、

いろいろな助成金を入れてきているんですけども、やはりそれが取れないときは、かなりいろいろな意味で運営が苦しいなという印象を受けたんですね。そこから辺、今、いわゆる固定的に入るような収入は、このNPO法人でどのようなものがあるのか、ちょっと伺いたいなと思ったんですけど。

○ゲスト 私どもの年間の予算は 6,000 万円ぐらい組んでいます。このうちの半分が町からの助成金でございます。あと半分が会員の皆様方の会費という形で賄っています。そのお金を使って観光宣伝、誘客等々に結びつけていくということで、大体 6,000 万円ぐらいの予算でやっています。

また、このNPOの活動をしていくためには、実はまちづくりのためにはもっともっとお金が必要になってきます。阿寒湖に1年間に入ってくる入湯税が約1億 2,000 万、1億 3,000 万でございます。私どもこのNPOとしては、ぜひ行政さんのほうに何とか入湯税の半分ぐらいを観光振興に使わせていただきたいという要望を持ちながらやっています。それと同時にNPO法人ですので、収益事業もできるようになりましたので、指定管理者制度等々で、行政さんから管理部門等々でもって人件費ですとか、活動費をこれから組み立てていくということで、ゆくゆくは8,000 万円、9,000 万円ぐらいの予算規模に持っていきたいと考えております。

今、3町が合併になって、釧路市はこの観光というものにもものすごく期待をたくさん抱えています。釧路市の釧路湿原の国立公園も含めて観光に対する認識が非常に高いものですから、市長さんにも来ていただきながらきちんとした観光予算については、確保していただけると自分たちは思っております。また、このNPOにした目的の1つに、釧路市にも観光協会がございます。また阿寒湖にも観光協会がございます。観光の部門としては、少なくとも釧路よりは自分たちのほうがむしろ進んでいるという発想でいたものですから、2つを合併されてしまって釧路市の下に入ってしまうと今の思った活動ができないということで、NPOを立ち上げたという1つの目的もございます。

○委員 ありがとうございます。

○委員長代理 まず質問の前に今日話を聞いていて、よその地域にとっても非常に示唆に富んだ話だなと思いましたが、阿寒の皆さんのまちづくりに梅川さんのところの財団が支援しているだけではなくて非常に多くの応援団がいるという。やはりこれがほかの地域にも非常にヒントになるのかなと思いましたが。そういうまちづくり応援団をいろいろな地域が1つ持つということが、これから重要なのかなと、皆さんのお話を聞きながら思いました。それが感想です。

それから半ば質問と意見に近いのですが、今日、まりも倶楽部の皆さんがいろいろな料理を考案されるとか、実際につくっているという話を聞きましたけれど、これから釧路と一緒にあって、例えば、2泊させたいという話になってくると、別に旅館で飯を食べなくてもいいので、まちで食べてもいいのですが、ようするにメニューの多様化が非常に必要になってくると思います。例えば、さっき話が出ました湯布院なんかに行きますと、一晚

は豊後牛を中心に肉を主体としたものなんですけれど、湯布院に限らず、今、山奥の温泉地でもかなり近くの豊後水道の魚のようなものが食べられます。それから例えば、黒川温泉があればにぎわっているのも、実は、やはり大分自動車道があってあそこからかなり入れるので、結構山奥だけアクセスはいいというところが、実は黒川のポイントです。黒川温泉に行って非常に印象的なのは、サービスや、たたずまいもさることながら、魚がほとんど有明海のものなものです。ですから、そういうような形で観光もさることながら、観光と一緒に、もちろん阿寒湖で捕れる魚もあるんですけど、これから例えば昔はサンマの刺身はなかなか本当に海の近くでなければ食べられなかったんですけど、最近東京都内、あるいは日本海に面した福岡でもサンマの刺身が食べられるようになったんですが、例えば釧路で捕れたサンマが阿寒湖のこの温泉で刺身で食べられるとか、そういう形で一次産業と観光業がどういうふうな形で連携していくのかなど。そういう、そのあたりの皆さんの取り組みなり、問題意識をお伺いしたいと思います。

○委員長 2泊以上阿寒湖温泉に引き留めるための魅力づくりについてはいかがですか。

○ゲスト 私ども合併の魅力の1つとしては、この阿寒湖というのは山の中でございます。どうしてもワカサギですとか、あるいは地元の分に頼っていくのですが、この合併によりまして、住所が釧路市阿寒町阿寒湖温泉になりました。釧路ブランドをいかに自分たちが自分たちの味方につけていくかということが、大きな取り組みの1つだと思います。

今年、3年目になりますが8月20日から10月15日まで、ここの阿寒湖のスキー場を使いまして、市長さんの仲立ちなのですが、釧路の漁業協同組合さんとタイアップしまして、サンマの朝食をこのスキー場のロッジを使って今やっております。もちろんサンマの大きなやつを炭で焼いた焼き立てを食べていただいて、そこで刺身を食べていただくとかということで、とにかく釧路ブランドとの結びつきを強くしていきたい。今、漁協さんが、確か国の何か助成をいただきまして、今度はイカを生きたまま阿寒湖まで運んでくる。そこで、刺身でもなんでもできるというような技術を開発されているということで、これも漁協さんが私どものところに来ていただいて、また私どもが行って、いろいろな取り組みの研究事例を始めているということで、ぜひ、この釧路ブランド、2泊、3泊、含めていったときに、食の部分としては折り込んでいきたい。また新しい部分としては、先ほどまわりも倶楽部さんからありましたザリガニですとか、エゾシカですとか、今までなかったマグロの刺身から脱皮した形での食事の組み立て、それから連泊型というふうに取り組んでいます。

○委員 ご説明をお伺いして非常に勉強になったと思っております。特に前町長さんのお話で、昔は雪が降ると交通が途絶するような所が、かなり道路なども整備されて、インフラの整備はすごく進捗してきたというお話がありました。そういうふうにインフラが整備されてきた中で、こういったまちづくりの活動を自主的に女性の方も中心になって、あるいはNPO法人を立ち上げてやっていらっしゃるということで、開発がある程度進捗してこれからは国土の形成という中で、住民がいかに自分の地域に誇りを持って、愛着を持っ

てやっていくのかということが、これから大事なんだろうということが、皆さんのお話を聞いてあらためて実感できたと思っております。

また、先ほどお話の中で、地域に英検1級を持っていらっしゃる方が何人もいらっしゃるのとことでした。英検1級って結構難しいと思いますので、そんなに阿寒湖のここに何人もいるんだなということであらためて認識しました。そういう意味では、地域にはやはり人材がいるので、その人材を生かして、その人材が、花いっぱい運動ですとか、地域に愛着を持って、自分たちのできることをできる範囲でやって地域に貢献していくことが広がっていけば、地域全体が良くなっていくんだろうと、そうやっていくのが一番お金のかからないやり方なんだろうと思います。非常にいい方向で取り組んでいらっしゃると思銘を受けました。

いろいろないい取り組みをやっていらっしゃるって、北海道では新聞にも出ていると思いますけれども、こういう取り組みをもっと全国的にPRしていくともっとビジネスにつながってくると思っています。

手元の資料を拝見すると、やはり今、北海道全体も観光客の入り込みが落ちていて、阿寒湖温泉に関しても落ちているわけですね。資料の中では、外国人観光客が最近急激に伸びているとあって、それは1つのいい方向なんだろうと思います。先ほど前町長さんが「台北かと思うような感じだ」とおっしゃっておられて、私も先ほど皆さんと一緒に外を視察したときに、中国語をしゃべっている人が通り過ぎていったので、確かにそのとおりでなと思ったのですが、そういったPRもこれからはマスメディアだけではなくて、口コミとか、インターネットとか、そういう取り組みをしていけば、海外から直接お客さんが入ってくるような時代にもなってくる。そうやっていくと、これまで地元で非常に地域に愛着を持っていい取り組みをやっていらっしゃる成果が、ビジネスと経済にもつながっていくのかなと思っております。

その辺のPR、あるいは、他との連携といった取り組みが鍵になるのかなと思っております。そういうPR戦略について、これまでJTBFと一緒にいろいろと取り組んでこられたのをさらに発展されて人を呼び込んでいくという方向性について、何か今後のプランがございましたらお話を伺えればと思っております。

○ゲスト 地域ブランドの連携というのは、本当にこれから釧路市との合併の中で水産、酪農、観光。観光がショーウインドーになるんだよと。そこで釧路の魚をお客さんの目の前に出していく。これがすごく素晴らしいことだと思います。その中で、今マスメディアとか、インターネットとか、外客対応という部分で、実は先週なんですけれども、準備委員会を設立しました。阿寒VJCS、ボランティアガイド、サポートをするという。阿寒湖畔に在住する外国籍を持った人たちが組みまして、それに回りに日本人でも英語が話せたり、中国語が話せたりする人がいますので、そういう人たちがグループを組みました。そして外国から来るお客さん、もちろん日本人もOKなんですけれども、そういう人たちに対応していくというような口コミ効果のあるものを、今回ルネサンスを通してやってい

こうかなと思っています。

通常ですと、先ほども僕が最初にお話しさせていただいたように、PRの上手な温泉地ほど売れるというのはあるんです。でも、先ほど「黒川の魚は有明の魚だよ」というお話がありましたように、「阿寒湖の魚は釧路の魚だよ」と言われるようなPRの仕方ができるように、こういう外客を誘致しているということがありますけれども、そういう受け皿をつくりつつやっていきたいなと思っています。

○ゲスト 今、話にでましたJVCSというのは、もちろん二世の方々もいるでしょうし、それからホテルの経営者もいるのですが、この中心としては、ホテルの中に働いている従業員さんの中に外国から来ている方もいますし、それから外国で生活している方もいる。この人たちの委員会をつくって、例えばパンフレットの翻訳、本当の言葉での直訳。学校で習った語学というのは、なかなかパンフレットをつくれないうんです。つくっていきくと失敗しているものですから、それをこのJVCSボランティアの組織をつくって、この人たちでつくったものをインターネットに載せていきたい。言葉を発信していきたい。それから、来た人たちに対するケアアップもしていきたいということで、今後、この後、多分立ち上げるための準備中でございます。

○ゲスト 私がまりも倶楽部に入って、いろいろこういう活動をするにあたって一番変わったのは、お客様に対する接客の仕方です。今まではただ売ればよいというような形でずっと来ていましたけれども、今は、お客様に対して、親切に、丁寧に、そして先ほどのこういうマップではないですけども、これをつくったことで、うちに買いに来てくださったお客様に必ずパンフレットをお渡しして、「ここがよいところありますよ。あとお時間、どのぐらいあるんですか」ということをお聞きして、それをうちのメンバー、一緒に働いている従業員の皆さんからみんな、そういうふう意識が変わりました。そして「まりも家族手形」も何回もしているんですけども、一番初めはみんな自分たちのどういうふうにしてお客さんに接したらいいのかということも分からなかったのが、2回、3回と続けていくうちに、本当に上手にお客様にお話しするようにもなりましたし、みんなの意識が随分変わったように思います。

○ゲスト 私自営で民芸品の店をやっております。皆さん一度歩かれたということで分かると思うんですけども、阿寒湖温泉地区は一般の商店街とは違って、これだけ木彫りの専門店ばかりというところが、今、分かれたと思うんですけども、それがまだいまだにお客様の口から出るのは、「あっ、こんなに木彫りばかりなのね」という言葉なんです。私としては、まだまだPRの仕方が足りないのかなというふうにも感じております。

高齢化ということもございまして、業種替えということは今さら考えられない地域ですので、それならやはり木彫りのブランドのまちとして頑張っていくしかないんじゃないかということ、すごく私自身感じています。それで商品開発のチームも今やはり札幌ですとか、旭川ですとか、木彫りの大きな問屋さんとかメーカーがございまして、秋になるとみんな見本市と行って札幌に出掛けていくんです。やはりそういった大きなメーカ

一から仕入れるものは、広範囲にあるものになってしまうんですね。それがとても寂しいことだなと私も思っておりまして、自分のお店でもオリジナルを年々増やしてはいるんですけども、やはり阿寒湖でのブランド。特に有名な木彫りの作家さんも現在おりますので、そういった方の作品を見ていただける場も必要ですし、この商店街の通り自体に木彫りのまちという雰囲気をもう少し出していければとすごく思っています。

阿寒湖は、今までは北海道の旅行というのは、私も神戸のほうから来たんですけども、あこがれの旅行先だったんですけども、金額的にも安くなってきましたし、今はやはりとても近くなったように思います。そういったリピーターの方たちが、飽きないための阿寒湖というものをつくっていかなくてはならないんです。今まではあこがれで来てくれていたとは思うんですけども、これからはリピーターを増やすために、何か戦略じゃないですけども、確かにお金を生んでいかなければいろいろなことはやっていけないと思いますし、私たちも生活していけないと感じているので、もっとアピールの仕方は、自分たちが考えて取り組んでいかなければならない課題かと思えます。

○委員長 ありがとうございます。だんだん時間が迫っておりますが、東京の会議ですと、5時は絶対に過ぎないように、委員の皆さんの発言をご注意申し上げるんでありますけれど、今日は非常に皆さん、真剣味はいつもと同じなんですけれども、また違う雰囲気でご発言をいただいておりますので、若干時間をいただきたいのですが、よろしゅうございましょうか。

○委員 この専門委員会は、人口が減っていく中でどうやって自立できる地域をつくっていかうかというのがテーマだと思うんですけども、先ほど委員の報告にもあったんですけど、阿寒での定住希望が4分の1しかないという。まずこれを上げなければいけないと思うのです。この阿寒は、先ほどからも皆さんが言われているんですけども、どうやって観光産業を強めていかうか。それと同時に住んでいる方がいかに暮らしやすいか。そういう地域をつくるという、この2つを追いかけなければいけないというテーマが、先ほどの説明でよく分かりました。

それで、専門委員会のいろいろな検討テーマの中に、地域コミュニティのあり方とか、あとは、いろいろな主体がどうやって生活関連サービスをしていかうかというテーマがあるんですけども、NPO法人のまちづくり推進機構、それとまりも倶楽部、素晴らしい活動をされていると思います。

まりも倶楽部の資料の平成14年度活動希望、やりたいこと、必要だと思うこと、できそうだと思うこと、いろいろ書かれているんですけども、この中にヒントがたくさんあると思うのです。こういったことをやはりこれからの計画づくりに、われわれもどんどん反映させていかなければいけないと思うのです。この間も、東京で会合があったときに、いわば高齢者が生きがいを持てるようにしなければいけないという意見が随分出されていたんですけども、このまりも倶楽部の活動希望の中にもそういったことが書いてあります。非常にわれわれのヒントになるようなことがたくさんあると思います。1つ、観光面での

質問なのですが、委員会の前に「冬は観光客が減るんです」という話を聞きました。

先ほど、前町長も言われていたのですが、むしろ冬の雪とか氷を生かしたような、そういうイベントができないのかなと思うんですよね。今、ちょうどイヨマンテの火まつりをやってらっしゃるようなんですけれども、そういう冬のイベントで、全国に打って出るといふか、そういう作戦があれば、お聞かせいただけますか。

○ゲスト 冬はここ数年、私はかなりお客様が増えていると思っております。そして、清水先生がおっしゃるように、やはり逆転の発想で、今までなぜお客様に来ていただけなかったか。冬は寒いから。寒いゆえにまたいろいろな遊びができるわけです。氷祭りも。この湖面が一面凍ってしまいますから、スノーモービルだとか、あるいは、すぐ目の前でワカサギ釣りができるとか。というようなあれで、逆に今、私たちの考えで冬こそ阿寒という感じでおります。だから、冬のほうがむしろリピーターとして来ていただけるお客さんは多いと思っております。そしてまた、そういう形にしていかなければ、やはり温泉の良さ、そういうものの特徴が出ないのではないかと考えています。やはりここに住めないというのは、基本的に「医・職・住」の充実だと思うんですよね。

「医」は医療なのです。これはまた、ホテル、旅館が満員になりますと、約 5,000 人、6,000 人。地域の住民を含めると 8,000 人ぐらい。その中で、病院の先生は 1 人しかいないんです。これが道立診療所です。何年かで交代という形で、病床がなしということで、私も町長になって一番先に高規格救急車を入れました。医の、本当のささやかな確保なんですけれども、われわれローカルの町村としては、医師確保と病院の維持が町長の最大の手腕になるような形なのです。医者先生はいるけれども、やはりどうしても全科を持っている総合病院に行ってしまうというような形。それと、「職」ももう少し自由な選択があればいいなと思っております。だから、そういう面の職、職業のつくり方ですね。

それと公営住宅も炭坑閉山のときに 1 回建てたやつをまた建て替えしました。最近は少しいんですけれども、これもやはりホテルで長年勤めた方々が自分の家を持ちたいと思ったときに、今まで土地がなかったわけです。それで、土地を形成しましたけれども、ちょっとバブル時期から外れまして、それがちょっと今余ってしまっているという感じでございます。まだ 20 戸ぐらい余っています。だから、もう少し早ければもっと、自分で自分の家を持てたのかなという感じがいたしております。

これから持ち家も大事ですけども、やはり行政自体が建てると、公営住宅にしても何にしても非常に単価が高いんですよね。だから、PFI というんですか。そういうような制度の利用もこれから町有地に必要かなと。その住宅関係と、それとやはりある程度の年代になって、いろいろな仲間がいて、話し合いができるような場をつくって、老後の充実をきちっとしておけば。うちの町は比較的跡継ぎは、ほとんどが戻ってきております。それぞれの企業においても。だから、わが町においては、跡継ぎが戻ってこなくて、2 代目がなくて廃業というようなところはあまりないですね。だから、できれば 2 人目の仕事があるか。これはこれからの宿題だと思います。

先ほど、先生がおっしゃったように、泊食分離と言いますか。泊まるのは泊まると。食事はまたそれぞれの分野で。フランス料理もいいでしょうし、炉端料理でもいいでしょうし、お客様がどういうものを食べたいんだということの希望を的確につかんであれすれば、1日に2,000人、3,000人、多いときは5,000人も来るお客様でございますから、そういう商売も成り立つと思うんです。そういう面の開発も、ある程度、これから行政も応援していかねばいけないと思っております。

入湯税につきましては、最初50%と言っておりましたが、「合併したらもう少し来るんでしょね」ということで、合併の市長と話したら、これから釧路の奥座敷の発展としては、入湯税をみんなつぎ込んでもいいようなことを話をするけど、これはまた財政と話をしないとなかなか危ない話で。私はできればそういうふうにしてもらいたいという希望を持っております。

○委員長 ありがとうございます。PFI、私ももう随分、5、6年間かかわってまいりましたけども、公営住宅ですと、大体4割ぐらい安くなりますよ。いいものができます。今日はこの話ではないので、またの機会にします。

○ゲスト 冬の観光の中で、われわれ、観光シーズン、グリーンシーズンは5月から10月まで。11月から4月までがオフシーズン、冬のシーズン、ホワイトシーズンになっています。先ほど前町長がおっしゃったとおり、冬はでかんしょ観光でみそと塩を買ってという形の中から、今この寒さを利用するということで、1月25日から3月25日、2月、3月につきましては、夏と同じような集客ができるようになりました。これは、流氷が来たということが東京のテレビに乗りますと一気に増えてきます。流氷、それから世界遺産がありますし、層雲峡、知床、阿寒というふうにイベントを3つ組んで、広がりを持つことによって冬の観光というのが大きくクローズアップされて、注目されるようになりました。それと、やはり住民の「ここで住む」という意欲が3分の1しかないということに関しては、前町長が今おっしゃっていただきました医療の部分というのは、非常にやはり大きな部分です。遊びに来ていただく方にとっては天国なのですが、実際に生活しているわれわれにとっては、非常にきついものがあるということ。それから、生活環境、基盤の中で、われわれの社員とか従業員は、ほとんどそのホテル内、企業が社員寮を建てています。したがって、6畳間ですとか8畳間という単室になっているのですが、若い方は半年、1年ぐらいはそれでも我慢できるのですが、将来的にやはりゆとりがない。あるいは文化的な部分がない。したがって、これから前町長が今おっしゃっていただいたPFIというのでしょうか、自分たちが建てて、今度、行政に運営してもらうか、もっとゆとりのある生活空間を演出できれば安定するかなと考えています。一番の悩みだと思います。

○委員 今日はいろいろなお話を伺えて、大変勉強になりました。ありがとうございます。私、2つ質問をさせていただきたいのですが、1つはこの専門委員会の名前は自立地域社会専門委員会と言うのですが、皆さんはこの自立地域社会と聞いたときに、ここ例えばどの辺りまでを、「ああ、地域社会だな」と思うのかな。というのは、先ほどからお話

を伺っていて、合併した釧路との関係が、何となく合併はしたんだけど私たちは阿寒で自立するみたいな雰囲気をととても強く感じるんです。今回こうしてお話を伺う機会がなければ、多分私は自立地域社会と聞いたときに、阿寒と釧路も一緒にして、「あっ、あの地域ね」みたいに思っていたと思うんです。実際は皆さんがいろいろなさっでいて、行政とかはいろいろ変わっていきますけれども、私たちの地域、私たちが自立した地域というときに、どんなくくりで考えるのか。あるいは、今はこうだけど何年かすれば釧路とも一緒になって、こんな一緒の地域ねというのが生まれてくると思いますということでしたらそれでも結構ですが、皆さんにとっての自立地域社会の範囲を感覚でいいので、個人的なご意見でももちろん結構なので教えてくださいということが1つ。

それから2つ目は、私は全国総合開発計画から国土形成計画になっていくというときに、人の持つ役割だとか、人間の力がどれだけ発揮できるのかという視点がとても重要になってくるのではないかなと。もちろん、いくつか視点はありますが、その中でも人間という要素をもっと重きを置いて考えていくようなことが大切ではないかと思っているんです。

皆さんのお話の中で、こちらはお子さんたちがこの地域外で教育を受けても戻って来ることが多いというふうにおっしゃっていましたが、これから次の世代。例えば、今10歳だとか8歳のお子さんが10年経つと20歳とかになるわけですね。この地域を担っていく次の世代を育てていくために、皆さんが国でなくても、北海道という単位でもいいのですが、何かその自分たちだけではできないことで、次世代の人を育てるためにハードでもいいですし、ソフトでもいいんですが、これを期待したいということがあれば、教えていただきたいと思います。

なぜ2つ目の質問をしたかというのを、ちょっとお話だけさせていただきます。私は、お話を伺っていて思ったのですが、観光を支えていくためには多分、道路ができていくようなインフラの基盤だったり、人間を速く運べるという技術ができたり、そういう技術とかハードの基盤というものがまず前提として1つあって、2つ目は、まりも倶楽部さんがなさっているような地域の創造性とか、クリエイティビティーみたいなもので、違った視点で新しい楽しさを生み出していくというのが必要だと思うんです。3つ目に、観光地としてずっと続けていくためには、戦略性みたいなものをどれだけしっかり（していくか）。内藤さんのお話の中にも戦略という言葉があったんですけども、ただ道路があつて、みんながいろいろ工夫してますよというだけでは、なかなか競争には勝っていかなくて、やはり戦略ということを考えられる人材がどれだけ地元を愛している人たちの中にあるのかということが、すごく大きなことになってくると思うんです。

私、一昨日、たまたま香港ディズニーランドに行っていました。例えば今地方で観光のお話を聞くと「中国のマーケットが」というのは必ず出るお話ですが、香港ディズニーランドに行って聞いた話で一番印象に残っているのは、香港は広東語なので、もちろん広東語といわゆる中国語の普通語というか北京語ですね。全く一緒ではないんですが、いわゆる標準語と英語のアナウンスは、基本的な例えば遊覧列車だとか、そういうところでは3

つの言葉が流れるんですが、ライオンキングのような要所要所にある人気イベントみたいなものは、広東語だけしかやっていません。香港のディズニーランドは、香港の人も来るし、南の広東の人も来るし、もっと内陸の、いわゆる私たちが言う全中国人が、メインランドからもやってくるんだと言っただけでも、地元で一番不評なのは、メインランドからやってきた人が楽しいアトラクションで広東語だけだから分からないという意味で、中国人を単純にひとくくりにははいけない時代に入ってきているときに、例えば中国のマーケットとどういうふうにつき合っていくのかということ、戦略的に考えていく。

今は中国のお客さんが来るけれども、地元には中国語ができる人がいないから、中国の学校と提携をして、トレーニングの形で人に来てもらい、サービス、観光の勉強をしてもらいながら、ちょっと力も借りましょうというのは、多分どこでも考えると思うんです。それは戦略ではなくて、次にその人たちが中国に帰った後に、彼らが冬のリゾート地を開拓して、中国の中で冬のリゾートを楽しむお客さんを発掘してくれたときに、育ててきた中国の中の冬の観光を愛する人を、「でも、やっぱり阿寒に行きたいよね」と、そこで育てた人を今度こっちにさらってくるというような、例えば戦略的な付き合いをどうやっていくのか。多分、そういうような発想とパワーがある人が必要なのではないかな。そういう人を育てるときに、企業であれば企業の社内留学で、いろいろな大学、海外の大学に出したりします。それはただ単にMBAを取るというだけではなくて、そこでいろいろな人脈をつくってくるとか、いろいろな考え方を知ってくるということが大きいわけです。

私は、このいろいろな地域が頑張っただけではなく、世界を舞台にしたときに地域だけでは例えば、留学するだけだったら語学ができればできるかもしれないですけど、そこで向こうの持っているいろいろなクラブ社会みたいなソサエティーの中にどう溶け込んでいくかというときに、いきなりポンと1人で行って4年暮らすのと、何か、誰かがバックアップをしてくれて、ちょっと導いてくれるようなところがあって4年過ごすのでは、多分人材が全然違うのではないかな。私はそんなところもこれからは考えていく必要があるのではないかなと思っているので、「次の世代に期待することは例えば何ですか」ということで、お尋ねしたかったのです。この2つです。

○委員長 ありがとうございます。それでは、これは本州の生まれで、結婚を機に阿寒湖温泉にお住まいになった、まりも倶楽部のお二人にお伺いしたいと思います。

○ゲスト 私が大阪で育ったときには、地元の歴史ですとか、そういうことを習って大阪で過ごしてきたわけなんですけど、こっちにポンと飛び込んできたときに、阿寒湖のことを何にも知りませんでした。本当にもう家族ぐるみで商売をしていましたから、お店の友達にそういういろいろなことを聞いたりするぐらいで、本当にやっと子育てが少し手を離れて、初めて阿寒のことを知ろうかなという意識になったんです。やはり自分自身のゆとりですとか、いろいろな時間がなかったらこういう活動も絶対できなかったと思うんです。やはり地域のバックアップですとか、そういうのがないと溶け込んで女性が自立してこういうまちづくりに参加していくというのは、なかなか難しいと思います。

○委員長 あれですね。先ほど釧路ブランドをどう取り込むかという話がございましたけれども、その範囲で、本当にこの地域の住民の方の意識をどう広げていくかというのが、また1つのこれからの課題でもありますね。

前町長、2つ目の質問ですが、次世代の人材育成ですね。これはどういうふうな取り組みをしていらっしゃるか、あるいは考えていらっしゃるか、お話しいただけますか。

○ゲスト これも大変難しい話でございまして、観光産業は、僕はマラソン産業だと思っています。今、やっと中国、東南アジアの方々においでいただいています。シンガポールにしたって標準語が中国語ですか。そういう面を考えると、中国語は欠かせないこれからの国際語の1つになっていると思っております。

今、この阿寒湖温泉を含めて、うちの町に中国語でごあいさつができる方は、おそらく2人か3人しかいません。それは中国の方です。中国の方が逆に日本に来て、日本語を覚えられまして、中国のお客さんが来たときにごあいさつしています。その方もやはり広東と北京ではちょっと言葉のニュアンスも違うし、われわれとしては字を書いて、筆談といえますか、これなら通じますけどあととはなかなか難しい。だから今、うちの町ではET、英語のサブティーチャーというのですか、語学の先生を招いているんですけど、それがオーストラリアとか、アメリカとか英語圏なんですよ。むしろそういう方々を中国の上海とかからお招きしたほうがいいのではないかと思います。その方々は英語がしゃべれますし、中国語がまずしゃべれますから、将来そういう形になるのではないかと。

それと合併の1つの大きな目的は、やはり公務員の中でそういう所にどんどん研修させて、そういう方々が戻ってきて地域でこうあれすると。やはりわれわれ自治体がなかなか小さい中小企業で、中国まで人材を出すといってもこれはせいぜいやっても一ヶ月か二ヶ月。そうなればやはり合併した大きな自治体の中からやはり多方面にあれして語学の堪能な方をつくりながら、地域全体として、ご案内できるような戦略を持っていかなければいけないと。今年の1月でございしますが、中国のエージェントの方が来ました。この方は全部二十歳代の方なんですけれども、私も町長としてちょっとごあいさつに行ったんですけども、冒頭「中国からお客さんを連れて来なさい、来なさいと言うけれども、日本に来て、中国語が話せるホテル、旅館のフロントさんがいますか」と言われました。これにはもうぎゃふんですよ。北海道ばかりではない。おそらく中堅都市においても、中国語でのご案内できる方は少ないんじゃないでしょうか。この辺にやはり日本自体が、今、慌てて観光立国なんて言っていますけども、そういう面の焦点が遅れているんですよ。英語圏専門に、あるいはフランス語圏専門にあればいいと。

やはりこれから東南アジアなり何なりが発展してくるとしたら、中国語、あるいはマレーシア語、そういう言葉もきちんと習熟して、国内にそれを話しできるような方法を取っていかなくてはいけない。言うなれば、多国籍、グローバルスタンダードの基本はやはり言葉ですよ。そういう面が私は遅れていると思います。そういう面で、こういう国土形成計画の中で、道路をつくるのも大事、港湾をつくるのも大事、空港をつくるのも大事だ

けれども、やはりこちらの文化も発信し、向こうの文化も吸収し、言語を自由にある程度話できる人間が10分の1いれば僕はいいと思うんですよ。だから100人いるうちに英語を話せる人が10人、中国語を話せる人が10人、あるいはフランス語を話せる人が10人。大体英語が話せる人はフランス語も話せるから、そういう形の戦略をこれからつくっていく。そして子どもたちにもそういう形の教育をしていくということが、やはり観光地のこれからの大きな将来の課題になると思います。そういう面で、行政の支援ですか。そういうものも大いに必要になると思っております。

○委員長 大学の教育も考えていかななくてはいけないですよ。大学のほうの教育もね。ありがとうございました。審議官、だいぶ時間が来ておりますけれども、いろいろお聞きになりまして、もしご感想、ご質問などございましたらご発言いただければと思いますが。

○峰久 観光とかまちづくりがだんだん一体化してきているなというのと、それからまちづくりにしていろいろな主体の方が本当に今日のまりも倶楽部の方、観光のNPO法人の方、それから町の方とか、いろいろな人が推進母体というのですか、推進主体が本当に広がってきているなと感じます。私は25年か30年くらい前だったですか、徳島市の開発部長を4年ぐらいやって、まちづくりも随分やっていたんですけども、そのころは、まだ再開発をするという関係権利者の集まりみたいな感じで、それに若干周辺の影響を受ける商店街が集まってくるぐらいだったのです。そこに女性の方々が、例えば周辺で影響を受ける商店街の奥さんたちが入るなんていうことは絶対になかったのですが、それが今日は、非常に幅広く、しかも生き生きとされているので、その辺が広がってきたというのが私の第一印象です。NPO法人化したと聞いてはいたんですけど、こんなにいろいろやっておられるというのを実感して、本当にそこは感激しております。

感想を2つだけ申し上げさせていただきます。最初に委員と前町長も同じことを言われたんですけども、計画づくりのための計画ではいかんというので、新たに実行もあわせながらやられるということで、私も国土計画も特に総合開発計画の初期の段階にいろいろな工業地帯をつくっていくんだというのだったら、これは逆に分かりやすい面があったのですけれど、形成計画になると多面的になってくると逆に分かりにくい面も出てくる。そういう中で、やはり計画づくりの中に、あるいは計画の内容そのものの中に、実際にどういうふうに変わっていくんだという、その手法とか現実の動きが、長期的なものを見ながら見えなければ、やはりなかなか国民は理解してくれないのかなというのと、そのために制度も変えるべきところは変えると。あるいは、その推進のための制度をつくっていくということが重要だなと思いました。そのため、計画の中に分かりやすく、かつ長期的な展望を、イメージを持って出せるようなものにしないと、逆に地域のほうが進んでいるよと言われるような計画になる可能性があると思うので、その辺は勉強させていただきたいというのが1つでございます。それからやはり国土計画をつくるときに、なかなか先ほどの地域の問題というので阿寒町。これが重要だから釧路と合併されるときにNPO法人で特質性は残そうとされたとか、やはり釧路との連携はサンマの話も出ましたが、やはり

連携は必要だなというふうに思います。

それからこの間、わが省から観光担当審議官がスロバキアの大使に出たんですけど、そのときにもらったパンフレットを見ていると、やはり国でもあの辺になるとオーストリアが隣にあるので結構強いんだろと思うんですけども、この弱いほうはルーマニア、スロバキアとチェコですね。この3国が一緒になってパンフレットをつくってやっている。同じように外国のことを何か考えると国レベルでやらなくてはいけないし、あるいは韓国と一緒にやらなくてはいけないかもしれないという、そういうふうな方法で、まちづくりのNPO、あるいはまりも倶楽部さんがやられている段階のまちを本当に動かしていくんだというレベルの話と、釧路の話、国の話、あるいは各国連携していくような話、この辺全体を言わなくてはいけないし、どういうふううまく表現していくのかなというのは、国土計画の中で難しい議論だろうな、重要な議論だなという。そういう計画を今後つくっていく中で、その辺の2点ほどちょっと感想を覚えましたので申し上げておきます。

○委員 感想の前に、冬季観光の話がありましたので、少しデータをつくってまいりましたので、それを見ていただければ一番分かるかと思えます。お手元に参考資料があると思えます。これの2ページ目の下をご覧ください。観光客の月別の入り込みシェアと書いてありますが、これを見ていただくと一発で分かるかと思えます。というのは、1年間の入り込みを100として、毎月、毎月の入り込みをそれで割っていくんです。そうするとシェアが出てくるということなんですけれども、阿寒の場合は、1月、2月、3月のシェアが高くなっています。これを見ていきますと、夏とほぼ同じぐらいのシェアになっているんです。こういう観光地って実は道内ではすごく珍しいのです。

先ほど前町長がおっしゃられたように、冬、頑張った結果がこれに出ていまして、通常だったら北海道の場合は、春から7、8、9、10月、このぐらいがピークになって、冬はもうガタッと下がるとというのが普通なのですが、阿寒の場合は、ものすごく平準化されているわけですね。これは観光の実は永遠の課題なんです。昨日は100人来たけど今日は10人しか来ないという、このピークが激しいというのが日本の観光の特徴なんですけれども、これがすごく平準化するというのが一番の理想なんです。これは施設づくりにしてもそうです。こういう現実にあるというのは、少しご理解いただければと思います。

それから感想をちょっとお話しさせていただきますと、やはりこの地域自立ということを考えていきますと、阿寒はじめ、観光地の場合はやはり恵まれている部分があるのかなという印象を持ちました。というのは、地域自立以上に、もう地域間競争の中にどう勝っていくかというのが、今の観光地の課題です。道東なんかで見てもウトロがあり、川湯があり、阿寒がありということで、実は連携もしますけれども競合もしているんです。昔だったら川湯のほうが阿寒よりもはるかにお客さんが多かったです。鉄道が便利だったということもあるんでしょうけれども、川湯がやっぱり道東の宿泊拠点だったのが、この数十年の間に阿寒は着実に力をつけてきて、今では入り込み客の数で見ても、もう圧倒的に阿寒が勝ってしまっている。ですから交通が発達すればするほど、実は競争相手は増えてく

るということだと思います。

それで今、インバウンドのこと、どこからお客さんが来ている。海外からのお客さんが増えていると喜んでいますが、実はそれで喜んでいてはいけないわけで、もうグローバルな世界で競争しているところをやはり考えなければいけないと思います。先々週、オーストラリアにケアンズという、グレートバリアリーフのベースにある町に行ってきたんですけども、そこでいろいろ話をして面白いなと思ったのは、この間まで非常に調子がいいと言うんですね。何で調子いいかという、実は北半球のアメリカにテロが起こると。オーストラリアの競争相手は、自然のある地域ということでカナダなんですよ。北半球にテロが起こると、みんなオーストラリアに来るらしいんですね。ですからこの3年ぐらいは非常に調子が良かったというわけです。

そうすると、この間、バリでああいう爆発事故が起こると、クタビーチとってオーストラリア人が多い所なんですよ。ですからイラクの問題に対して、オーストラリアは派遣しているということに対しての批判がああいう爆発につながっているのではないかと。ことで、オーストラリアにはお客さんが来なくなるのではないかと。そうすると、今度はカナダに行くだろうと言われていたんです。そういうグローバルの中で、今はもうどうなるかということを考えながら観光地運営をやっているというのが現実だと思います。ですから今、やはり阿寒に外国人が増えてきたということだけではなくて、来るお客さんというのは、阿寒に行こうか、それともカナダのバンフに行こうか、あるいはジャスパーに行こうかってグローバルな中で観光地を見ているので、その中でぶつかっていく。国内だけの問題だけではなくて、海外もやはり見ていかなくてはいけないというような中にあるのかなと思います。

阿寒がこれからもう少し発展していくためには、何が必要なのかなということで、僕は3つぐらいあるのかなと思います。1つは、やはり体験のメニューを増やしていかなくてはならないなと思っています。こういうプログラムをつくりましたけれども、やはり阿寒に来ていろいろな本当は楽しみができるんです。それを来てくれるお客さんに全然とは言いませんけど、教えてあげなかったら分からないというのがあると思うのです。自然なんかでもそうです。教えてあげなければ、やはり分からないのですよ。もう本当に、実は阿寒のいい所を全然まだ見せていないというのが現実だと思うので。阿寒は自然が抜群にいいので、そういう自然を生かした体験プログラムをたくさんつくってあげるのが、やはりこれから重要なのかなと思います。

もう1点は、これはやはり地産地消的な考え方なのかなと思います。やはり釧路と合併して、そういう魚だとかありますし、実は阿寒の本町でもいい野菜をつくっていたりする人はたくさんいるのです。これがこういう大きな旅館に安定して規格のそろったものを供給するのが難しいということで、なかなか連携ができないのかもしれませんが、やはり地場のものを安全なものを安心して食べてもらう。スローフードは、もう世の中の流れかなと思うんです。そういう面とあわせて、実は観光の経済波及効果の話が先ほどあり

ましたけれど、これは観光の経済波及効果を高めるためには、お客さんを増やすということと、客単価を上げるということ、もう1つは地元の調達量を高める。この3つがそろわないと駄目なんです。一番重要なのは、最後の地元の調達率をいかに高めるかということ、付加価値づくりということなんです。ですから原価ゼロの、例えばこの周りで採れた山菜をちょっと加工してあげれば、それだけが付加価値になるわけです。だからそういう地産地消みたいな考え方もやはり徹底してやらなければいけないと思うのが2つ目です。

3つ目、一番重要なのは、先ほど委員もおっしゃられましたけれど、やはり人材なのかなと思います。私も横からずっとNPO法人の活動を見ていて、これは限界に来ているかなと思います。というのは、皆さん仕事を抱えながらまちづくりをやっているんで、専従の方は1人しかいらっしやらない。もう少し人的なサポートが必要だし、私はやはりこの地域間競争の中で勝っていくためには、いかに優秀な人材を阿寒に連れてくるかということにかかってくると思います。昔は企業誘致とか、工場誘致とか言っていたんですけど、今は完全に人誘致で、その質の高い人が阿寒でどれだけ活躍してくれるかというのが、今後の阿寒を決めていくと思います。そういう人材の問題が一番重要なのかなというふうに思いました。以上です。

○委員長 ありがとうございます。最後に、また人材の話が出てまいりましたけれども、今日は、私が感じたのは、町長以下、リーダーの方々が、その地域の人材を大変うまく生かしていらっしゃるという感じがします。ずっとこの地域でお育ちになった方、それから前町長は出戻りだとおっしゃっておられましたけれども、いったん出て帰ってこられた方。それからまりも倶楽部のお二人のように成人してからこちらに来られた方、よそ者ですね。それから梅川委員のような本当のよそ者、悪い意味ではございませんが、そういった方々をうまくこの地域が生かしていらっしゃるというのが本当に感じたところでございます。

だいぶ時間が延長しました。私は、今日は思う存分延長させていただきました。5人の方々には、大変長時間お付き合いいただくことになりました、おわびかたがたお礼を申し上げます。それでは議題はこれで終わります。あと、事務局のほうにお返しますのでもよろしく願います。ありがとうございます。

○事務局 本日は大変ありがとうございました。事務局として最後にこういった計画づくりを、今後約2年かけて国のほうで続けてまいります。先ほど審議官から申し上げましたようなきちんと足腰のある計画にしていくという意味で、これ1回こっきりのお話でなくて、継続的にご関心を持っていただきながら、私たちからもまた発信することがあると思いますので、ぜひそういう目でご覧いただきたいと思います。今日はお休みのところ、多くの方にお越しいただきましてありがとうございました。皆様にもぜひそういう意味でご関心を持って見ていただければ、大変ありがたいと思います。

次回の委員会は、東京で11月15日、火曜日の10時から開催させていただきます。よろしく願いいたします。以上をもちまして、本日の専門委員会を閉会させていただきます。大変ありがとうございました。